
静かの海

くろやまねこぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かの海

【Nコード】

N9963W

【作者名】

くろやまねこぞう

【あらすじ】

内定を取り消され、やさぐれる大学生・矢野行成は、近所に住む小学生・マサキとふとしたことがきっかけで知り合う。転入したてで周りに馴染めないマサキは、親切な行成に懐き、行成もまたそんなマサキを可愛がる。二人は徐々に親交を深めていくが、マサキには行成にどうしても言えない秘密があり……。青春の入り口と出口で出会った二人の、成長と小さな恋の物語。

プロローグ

その人を初めて見たとき

泣いているように見えただ――

「マサキ、もうそろそろおじさんが迎えにくるから、家の外で待ってなさい」

そう急かされ、顔を上げて母親の方を振り向いた。

父親が愛し、自分が生まれ育ったこの家。だけれども、家主を失ったことで、自分たち家族はここを離れ出て行くことになった。

寂しさとも悔しさともつかない気持ちを抱えながら、ぎゅっと手の中にある多孔質の白い石を握りしめる。

家の前でボーツと佇んでいると、ブレーキの音と共に海外製の緑のワゴン車が滑り込んできた。

重いドアを開いて後部座席に乗り込むと、キャンキャンと吠える犬が膝に絡みついてくる。なんとかあやしつけていると、少し送れて母親も助手席に座った。

車がゆっくりと加速していく。行き先は、都心に近い住宅街だ。母親の実家にほど近い場所であり、ここよりもずっと人が多くてにぎやかだと聞いている。

母親は住み慣れた街に戻れることを喜んでいたようだが、自分にとってはまず馴染みがない。

「高速、混んでるかしら」

「五・十日だからちよつと渋滞してたよ。でも、まだ早いからそんなんでもないんじゃない」

大人二人の会話を聞き流しながら、遠く晴れた空に漠然とした不安を感じていた。

小学生（1）

『誠に勝手ですが、事情ご理解の上お聞き入れ下さいますよう何卒よろしくお願いいたします。』

まずはお詫びをお願い申し上げます。

敬具』

そう締めくくられた白い紙をぐしゃりと握りつぶすと、公園のベンチに腰掛けた彼は唇を噛んで俯いた。

吹く風が生ぬるい。本格的に梅雨のシーズンを迎えるまであと少しだろうか。そんなまとわりつくような周りの空気も、彼の気分を一層苛立たせていく。

（何が『敬具』だ、ちくしょう——）

一体自分が何をしたというのだ。脚を棒にして何十社と周り、週末という週末をほぼ会社説明会に宛て、いろんなものを犠牲にして勝ち取ったはずの内定だった。

採用通知が来た日は嬉しくて、何ヶ月も連絡をしていなかった実家にまで電話をかけてしまった。

『アンタ、入ったからにはちゃんと勤めなさいよ』

母は喜びながらそう口にした。まだ入社したわけではないが、内定を貰えばこちらが蹴らない限り入ったも同然だ。もちろん、母親に言われなくても、この不景気の最中せっかく採ってもらった会社だ。ちよつとやそつとのことで辞めるつもりはない。

それなのに、何で——

こんな紙切れ一枚で、その覚悟もすべて霧散してしまった。ここ数ヶ月の努力だけでなく、今までの人生全てが否定された気分になる。

悔しい――けれど、涙の一つも出てこない。

同じような思いをしている学生などごまんといる。そういった者達と傷をなめ合うことができたなら、この気持ちも少しは楽になっただろう。だけれど、四年進級時にうっかり留年をしてしまい、友達のほとんどが既に卒業していった彼にはその痛みを分け合う仲間すらおらず、ただやりきれない想いで砂利を蹴るしかなかった。

ザツと革靴の底が嫌な音を立てた瞬間、下を向いていた視界がふと暗くなった。

「ねえ」

近くで高い声がした。このまま無視しようとしたが、その声の主はもう一度「ねえ」と言った。

しぶしぶと顔を上げる。逆光で最初はよく見えなかったが、シルエットから判断して、どうやら話しかけてきたのは男の子のようだ。目がだんだん馴れてくる。男の子は見た感じ小学校高学年か。さらさらの髪の毛に中性的な顔立ちが特徴的で、これであると二年もしたらアイドル系だと女の子にキャーキャー言われそうなタイプだ。それが、迷彩柄のTシャツに半ズボン、黒の運動靴という幼さのまだけたっぷり残った格好をしており、半ズボンから伸びる足は程よく日焼けしていた。

「なんだよ」

胡乱な彼の反応に男の子は少し怯んだような表情を見せたが、すぐに真っ直ぐな視線で彼の目を見て言った。

「お兄さん。うちの犬みなかった？」

「犬？　どんなの？」

「耳が△でさきっぽが折れ曲がってて、茶色と黒の間みたいな色しててこれくらいのこと……」

男の子が手振りつきで一生懸命説明する。が、生憎そのような犬はここに来る前も途中も見かけたことはなかった。

「いや、見てないけど。逃げたの？」

「うん。さっきまで一緒に散歩してたんだけど、信号待ちしてる間にいなくなっちゃって。あいつすごい足早いから……」

そう言って睫毛を伏せた。可哀想だと思ったが自分にはどうすることもできない。一緒に探してやるほど自分もお人好しではない。

「悪いけど他あたって」と言おうとしたとき、男の子の肩越しに砂場を横切る茶色い影が見えた。

「あ、あれじゃね？」

男の子が振り向く。「あっ！」と声を上げると同時に、見つかったことに気づいた犬がやおら走るスピードを上げた。

犬は男の子の言うとおり、とても逃げ足が速い。男の子が追いかけるが、子供の脚ではとても追いつきそうにない。

一生懸命走る男の子の姿を見て、俄にくすぶっていたプライドに火がついた。

「元野球部なめんなよ！」

彼は急に立ち上がってそう宣言すると、犬の方に向かって駆けだ

した。スーツの下に革靴なので多少動きづらいが、それでも持てる限りの力を出す。

犬が池の前で急に進路を変える。それを見越して彼はショートカットして犬に飛びつく。リードが手に触れる。あともう少し。

「よっしゃー!!」

ずざーっと地面に転がりながら、間一髪のところまでリードを捕まえた。首輪を引っ張られた犬が情けない鳴き声を出して立ち止まった。

犬がワンワンと吠えながら今度は彼にじゃれついてきた。まったく、変わり身の早い犬だ。

「すみません、大丈夫ですか!？」

パタパタと追いついてきた男の子が青い顔をして彼に尋ねた。服は汚れてしまったが払えば何ともないし、こんな子供に心配してもらうのも決まりが悪い。

「いや、大丈夫大丈夫」

そう言ってリードを男の子に渡した。久々の全力疾走は、疲れたがなんとも気持ちよかった。少し、気分も軽くなった気がする。

「今度は、離さないようにしなきゃダメだぞ」

立ち上がって男の子の頭をぽんぽんと撫でた。夕方6時のチャイムが遠くに聞こえる。

さて、自分もそろそろ帰るか、と伸びをしたとき、男の子が不安げに口を開いた。

「お兄さん、大井戸町ってどっち？」

「大井戸？　ここから結構あるぞ」

聞いてぎょっとした。今いる公園からだ、大人の自分でも歩いてたっぷり30分近くはかかるだろう。

男の子はバツが悪そうに呟いた。

「散歩させてたら、迷っちゃって」

……土地勘のない子なのだろうか。

言葉で説明しても伝わりにくいだろうし、ちょうど自分の家も同じ方面だ。それに、日も暮れかかっているのに小さな子をひとりで歩かせるのは危険かもしれない。

「しょうがねーな……。近くまで、送ってやるよ」

2, 3回首を回してからそう言うと、男の子の肩を押して歩き始めた。

地面には小さな影と大きな影、それに挟まれた犬の影が長く伸びていた。

小学生（2）

大井戸町まで帰る途中で、犬が道にしゃがんだまま急に一步も動かなくなってしまった。

口笛を吹いても置いてけぼりにするそぶりを見せても一向に動かない。男の子は「またか」とため息をついた。

「どうしたんだ？」

「こいつ、いっつもこうなんだ」

そう言っただけの子は細い腕で犬を持ち上げた。少し大きな小型犬ぐらいのサイズだったが、子供の体力では抱えたまま歩き続けるのはいかにも大変そうだ。しかも、まだ道のりは半分ぐらいまでしか来ていない。

「貸して」と言っただけで犬を男の子から奪った。柴とビーグルの雑種だというそれは、近くで見ると愛嬌の良さと凛々しさが絶妙なバランスだった。

犬を抱っこしながらニヤニヤしていると、男の子が不思議そうに聞いてきた。

「お兄さん、犬好きなの？」

「ああ。実家にはもうじじいの犬が二匹いてさ、どっちも雑種でブサイクなんだけどそれがもうすげー可愛いだよ。それで、小さい頃は獣医になりたかったな」

実家の犬が吐血して倒れたとき、あまりにも心配で「大きくなったら絶対に自分が治す」と心に誓った。そしてしばらくは本気でそっちのほうに進路を決めようとしていたのだが。

男の子が当然のごとく疑問をぶつけてきた。

「なんでなんなかったの？」

「俺、猫アレルギーなんだ」

近所の猫が家に入ってきたとき、目は涙で一杯になるわ、体中は痒くなるわで大変な思いをした。それ以来、猫は自分にとって天敵である。

「そっか。獣医さんそこには猫もいっぱいくるもんね」

「だろ。だから俺は諦めた」

そうでなくても獣医になるのは非常に狭き門をくぐらなくてはならないと後々知るのだが……。その辺は小さい子に説明しても解らないだろうと思い、省略した。

今度はこちらから男の子に質問する。

「名前なんていうんだ？」

「名前？ ガリレオだよ」

「犬じゃなくて、お前だよ」

「あー……、え、と」

男の子は一瞬口ごもってから、小さな声で呟いた。

「まさき」

言うのをためらったからどんな変な名前なのかと思いきや、案外普通に拍子抜けした。

「マサキか。なかなか渋くていい名前だな」

最近は奇抜な名前を付ける親も多いと聞くが、それなりにきちんとした家の子なんだろう。そういえば、自分に敬語は使わないものの、しゃべり方もこれぐらいの歳の子にしては落ち着いている。

「お兄さんは？」

「俺？ 俺はユキナリ。行くに成るって書いて行成」

「何やってる人？」

「大学生だよ」

彼の言葉に、マサキはびっくりしたように目を見開いて、そのあとくすくすと笑いながら言った。

「へー、そうなんだ。ネクタイしめてるから働いてる人かと思った」

そう言われ、自分がスーツを着ている理由を不意に思い出した。

今日は以前お世話になった講師の学会発表があったのだ。出掛けにポストを覗いたら内定先からの手紙が入っていたので鞆に放り込み、帰りに内容を読んでみた。あのザマだ。

就職が決まったことを恩師に伝えたと、それはもう喜んでくれた。あの笑顔も自分は裏切ることになってしまった。しかも、学会では昔付き合っていた女が他の男と仲良くやっている様まで見てしまった。

今日は人生最悪の日だ――、そう思っていた。

けれど今は、何故か心がそんなに重くない。

（やっぱり子供と動物の癒しパワーってすげえな。）

あどけのないマサキの横顔を伺いながら、彼はそうしみじみと感

じ入った。

早々にシャッターを下ろしてしまった簡易郵便局の前で、マサキは立ち止まった。

「もうすぐそこだから、ココまででいいよ」

ふと見ると、電信柱の住所表示にも「大井戸町」と書いてある。やっと近くまで来たようだ。

「そっか。今日は大変だったな」

犬をマサキに受け渡す。「おっと」と言いながら抱え直すと、マサキは勢いよくこちらに向かって頭を下げた。

「あ、あの、ありがとうございました」

急に礼儀正しくなる。そんなマサキがおかしくてちよつと笑ってしまった。

「じゃ、またいつかどっかで会おうな」

「うん、またね。本当にありがとう！」

そう手を振りながら、二人は別の道を歩き出した。

小学生（3）

二つめの角を曲がると、見慣れた自宅の外灯が目に入った。

犬のリードを玄関の支柱に繋ぎ、特にチャイムを押すこともなくドアを開ける。

「ただいま」と呼びかけると、台所から母親が顔だけ出して言った。

「遅かったじゃない。おじさんもう来てるわよ」

それは玄関に男物の靴があるから知っている。リビングへ向かうと、叔父がソファにもたれかかりながら、ワイシャツを着たままビールを飲んでいた。

「おじさん、ガリレオ散歩させてきたよ」

「おー、すまん。ありがとう」

ガリレオはもともと叔父の犬である。ここ1週間出張で家を空けるとのことで、叔父の姉である母親が預かっていた。

「ほら、お礼だ」と言ってお出張先の名産であるカスタードまんじゅうを受け取った。椅子に座ってもぐもぐと食べていると、母親が追加のビールをもう一本持ってきた。

叔父はビールの栓を抜きながら言った。

「どうだ、マー坊、友達100人ぐらいできたか？　好きな子のひとりやふたりいるんだろう？」

唐突な質問に心臓が跳ねる。顔が赤くなってくる。そんな様子を、

叔父はにたにたとしながら見ていた。

まんじゅうを気管につまらせそうになりながら飲み込むと、しどろもどろの体で言った。

「あ……、そうだ、宿題やんなきゃ！」

椅子から飛び降りて、急いで階段を駆け上る。バタン！とドアが閉まる音が聞こえると、リビングに居た母親は大きくため息をついた。

「忠晴、あの子に変なこと言わないでよ。なかなか友達できなくてへこんでるみたいなんだから」

4月に転入してきて2ヶ月経つというのに、一向に学校での様子や友達の話をしてこない。そんな自分の子供に、彼女は日々心を痛めていた。

「おお、すまんすまん」

「それに、マー坊って止めてって言ってるでしょう」

「でも、呼びやすくて」と受け流そうとする弟に、彼女は「本当に勘弁してよ……」と涙ながらに言った。

「あの子……、真咲はちゃんとした女の子なんだから。あの子もアタも、どうかしてるわ……」

真咲は自分の部屋に戻ると、窓を開けて空を見上げた。
紫がかった西の方の空に、葉っぱのように細い月が引っかかって
いる。

ベッドサイドに置いた石を手のひらで包むと、心の中で月に向か
って呼びかけた。

（お父さん、今日は聞こえる？）

去年、病気でその短い命に幕を下ろした父親。父は息を引き取る
直前に、死期が近いのを勘づいていたのか、末の娘である真咲に向
かってこんな事を言った。

『真咲、もしお父さんがいなくなっても、お父さんはずっと真咲の
ことを遠くから見てるからね』

遠くってどこ？ と尋ねると、『そうだね、お月様ぐらいかな』
とはにかんで笑った。

『月に行ったらもう会えないよ』

そうぐずる真咲に、父はこの石を手渡したのだ。

『なにこれ？』

『月の石だよ。お父さんはそれを取ってちゃんと帰ってきた』

しかもそれを持ってるとう月にいる人と会話ができるんだよ、と。
嘘みたいな話だ、と思った。それから幾ばくもしないうちに、父
親は本当に天へと旅立ってしまった。

母親を心配させたくなくて、皆の前で涙を見せることはなかった。

けれど、一人になるとあの優しい笑顔を見られないことが淋しくて、目が解けるほど泣いた。

そんな中、父からもらった月の石のことを思い出した。魔法や奇跡を信じる歳でも無くなっていたが、万が一にも本当に父と会話ができるのならば、試す価値はある気がした。

（お父さん）

呼びかけると、『なに？』という穏やかな声が耳を掠めた。微かだが、確かに聞こえた。

月にいる父親も、こちらで生きていたころと同じように忙しいのか、話しかけても答えが返ってこない日もあった。だけど、こちらに引っ越してからほだいたい毎日現れている。

いつしか真咲にとって、毎晩月に祈ることは日課となっていた。

（お父さん、今日、変な人に会ったよ）

今日はあまり用事がないのか、『へえ、どんな人？』とすぐに返事がきた。

（男の人のくせに色が白くて、目がへ音記号よこにしたみたいな形で、口が猫みたいに真ん中がとがってて……）

『ふんふん、そうなんだ』

（でもそのくせ猫がダメなんだって。それで、最初、ベンチに座って下向いてるから、大人なのに泣いてるのかと思った）

『で、どうしたの？』

（気になって話しかけたら、ちよつと怒ってるみたいなしゃべり方だったからびっくりした。……けど、すごい親切だったよ）

『そうか。いい人だったんだね』

思い出すだけで心がむずむずする。ガリレオをダイビングキャッチしたところも、「しょーがねーなあ」と言いつつ肩に触れた手が優しくかったことも、犬を抱っこしながら幸せそうに笑っていたことも……。大人の人があんなにくるくる表情を変えるのなんて、今まで全然知らなかったから、馴れないことに心臓はばくばくいいっぱいだったんだ。

またどこかで、と別れ際に言った。あの時彼はどういふつもりで言ったのかわからないけれど、少なくとも自分は本心から言っていた。

（もう一回会えたらいいな）

そう願った真咲に、心の中の父は『それはお父さんに言われても分からないよ』と穏やかに笑った。

藍色（1）

きっかけは、父方の祖父母がくれたランドセルのように思う。

それまで真咲は、大人しくて目立たない普通の子供だった。年の離れた兄姉は物心も十分ついたところにできた小さな妹に対して感心が薄く、母親は手のかからない子なのを幸いに、真咲が就学する前から仕事に復帰していた。

「真咲、おじいちゃんおばあちゃんからプレゼントだよ」

小学校に上がる直前、彼女は自分宛に届いた包みをあけてびっくりした。そこには、青色とも黒ともつかない不思議な色合いのランドセルが入っていたからだ。

「きれいな色だね」

「ホントだ。お父さんも大好きな色だ」

父親はそう言って「これは藍色って言うんだよ」と真咲に教えた。あいろ、あいろ……。耳慣れない響きだったが口に出すと心地よく、また難しい言葉を知ったことで少しだけ大人になった気がした。

今になって思うと、祖父母があのような色を選んでしまったのは、真咲の性別を一つ下の従兄弟と間違えていたのかもしれない。母親は「女の子なのにこんな色を使うのなんて可哀想」と送り返そうとしたが、父は本人が気に入っているのだから、とそれに反対した。

結局真咲の「どうしてもこれがいい」という駄々により、母親が折れた形になり、入学式には喜び勇んでそのランドセルを背負い校門をくぐった。

幸い、入学した小学校には保育園からの見知った顔も多く、また

そこそこ田舎でおおらかな土地柄だったため、真咲のことをランドセルの色でいじめるような者は一人もいなかった。むしろ、「珍しいね」と言われてすこし得意になったりもした。

それから真咲は髪を切った。小学校に入り行動範囲が広がると、もともと女の子同士がするようなお人形遊びが得意ではなく、野山をかけずり回る方が性に合っていることに気づいたからだ。洗うのも乾かすのも、短い髪は楽である。そして着る服も、より動きやすいもの、汚れが目立たないものを多く選ぶようになっていた。

そんな真咲の変化に母親はあまりいい顔をしなかったが、真咲は別に悪さをするでもなく肝心の勉強には真面目で、近所の子を持つ親から「優秀でうらやましい」と褒められる。自身も忙しくて構ってやれないことが多い手前、娘に強いことを言える立場になかったのだろう。

気が付くと真咲の外見は、同年代の男の子のそれとほとんど変わらなくなっていた。

そんな様に、ちょっと風変わりながらものんびり育っていた真咲だが、ある時期を境に生活は一変する。

有能な外科医だった父親の死。もともと都会育ちのお嬢さん気質だった母親は、田舎の暮らしにどうしても馴染めず、真咲をつれて実家へ帰ると言い出したのだ。

上の二人の子供は進学や就職ですでに家を出ている。それに、亡き夫にして土地の人間というわけではなく、たまたま待遇の良い病院があったためそこに赴任してきたに過ぎない。

真咲が小学校の六年にあがるのを機に、母娘は街を離れた。

「せめてあと1年、みんなと一緒に卒業したい」――真咲の願いは聞き入れられなかった。

真咲が新しく入ったのは、都内でも比較的裕福な家庭の集まる地域の公立小学校だった。周辺の学校に比べ荒れている者は少なかったが、その分どこか余所者を寄せ付けないプライドのようなものを感じた。

真咲は地方からやって来たにもかかわらず、素朴な雰囲気がなく、どちらかというと醒めていて勉強もできる。それに加え服装はまるで男子のようで女子とはつるむ気配がない。

クラスのリーダー格の女子に「生意気」「変人」と目を付けられるのも時間の問題だった。

他の児童達にもそういった空気は瞬時に伝染する。担任の教師に「真咲ちゃんのことよろしく頼んだよ」と言われた学級委員の子とその友達のみ、教室移動や給食の際などに真咲に話しかけていたが、リーダー格の女子の顔を伺っているのか、明らかに腫れ物を触るような扱いでしかなかった。

「真咲ちゃん、あたし、これからバトン部の練習だから」

帰りの会が終わると、学級委員の子が「だから、ごめんね」と首を傾げながら言った。けどもうそんなの言われなくても分かっている。彼女はいつも部活や塾があって、一緒に帰ったことなどこれまで一度もない。もしかしたら断る為の嘘なのかもしれないが、そんなの確かめたって何にもならない。

（まあ、仕方ないんだけどね……）

藍色のランドセルを背負うと、昇降口で運動靴に履き替え、鈍色の空を見上げてため息をついた。今さら服装の趣味を変えることもできず、愛想良く振る舞えない自分が悪いのだから。それに中学は母親の期待する私立の学校に進学する予定だ。泣いても笑ってもあと数ヶ月。そう思えば我慢できる。

だけど、きゃあきゃあと楽しそうにじゃれ合いながら下校する児童の群れを見ると、なんとなくやりきれなくなってくる。自分だって地元にいればあの中にいられたはずなのに。

（みんな、どうしてるかな……）

懐かしい友達の面々を思い出しかけたところで、鼻先にポツン、と冷たいものを感じた。

（――雨だ）

そう思ったが早いか、雨足は急激に強さを増してきた。やばい、と傘を持っていない真咲は、近くの屋根付きのバス停へと逃げ込んだ。

薄いプラスチックの屋根をドタドタと激しい雨が打ち付ける。「そういえばお母さんが朝傘持って言って言ってたな」と思い出すがもう遅い。どうすることもできないまま、真咲はバス停に佇んだ。

雨はいつ止むとも知れない。遠くの空を睨むが雲の切れ目はまったく見えない。途方に暮れていると、目の前に一台のバスがゆつくりと滑り込んできた。

ぎゅうぎゅう詰めの中内から、一人、二人と乗客が降りてくる。客はバスに乗ろうとしない真咲のことをすれ違い様に奇異な目で見ていったが、すぐに傘を開くと興味が失せたように歩き出した。

バスは乗る人もいないのになかなか発車しない。どうしたんだろう、と見ていると最後一人の客がやつとはき出された。その客は長

い手足をよろめかせて地面に降り立つと、バス停にいた真咲の顔を見て「あっ！」と言った。

「お前、この前の……」

彼の方は名前が出てこないようだが、真咲はよく覚えている。

（ユキナリ、だ）

だけれども、驚きすぎた真咲には声を出すことができなかった。

藍色（2）

郵便局の前で別れてから、一緒に歩いた時のことを何度も何度も繰り返し思い出してきた。その度に、「もう一度会えたらいいな」などとぼんやり願っていた。

だけど、名字も連絡先も分からない。「近くに住んでいる大学生」ならごまんというだろう。隣に住んでいる人の顔すら知らないこともあるこの時代だ。再び出会うことなど奇跡に等しい、そう思っていたが……。

（どうしよう、本当にまた会えた）

今日の行成はネクタイを締めていないせいか、以前会った時よりもずっと若く見えた。もともと童顔っぽい造りもあり、顔だけ見れば高校生と言っても通用しそうだ。

自分の顔を見上げたまま固まってしまった真咲に、行成は首を傾げながら尋ねた。

「お前、こんなところでどうしたの？」

真咲はかさつく喉から、声を絞り出して答えた。

「あ、あの、急に雨ふってきたから、雨宿り」

「ああ。傘がないのね」

真咲の両手は空いていて、シャツは端々が濡れて変色している。そんな姿を見て、行成は納得したように頷いた。

「俺んちすぐそこだから、傘もう一本持ってくるよ。貸してやっから」

後ろの方を指さした行成に、真咲はぶんぶんと首を振った。

「でも、今日カギも忘れちゃってて家に入れないんだ」

先ほどポケットの中に手を突っ込んだら、いつも持っているはずのカギが見あたらなかった。晴れていれば庭にある脚立でも使って開いてる二階の窓からでも侵入するところだが、この雨ではそうもいかないだろう。

「家族は？」

「いない。みんな出掛けてる」

母親は6時過ぎにならなければ帰って来ないし、本宅の祖父母も今日は町内会の旅行で出掛けてしまっている。どのみち、雨が止むまで待つしかないのだ。

すると行成は、「ふーん」とあまりヒゲの生えてない顎を撫でながら言った。

「そんじゃ、さ。ちょっとお前うち来る？」

「えっ」と真咲は目を円くする。

思ってもいない申し出に頭が混乱し始める。よく知らない人に着いていってはいけないと言われているが、どこをどうとってもこの人が悪人だとは思えない。だけど、一応自分は女子だしもし万が一下心があったとしたら……などと考えがぐるぐる回る。

どう答えていいかわからずしどろもどろになっていると、行成は「へっ」と少し情けなさそうに笑った。

「バイトでやってるテストの採点なんだけど、結構量あるから手伝ってほしいんだわ。もちろん、なんかお礼はするからさ」

そう頼まれて心がぐらりと動いた。この前助けてもらった借りがある手前、断ることはできない気がした。

……というのは建前で、本当はこのお兄さんがどんな生活をするのか、非常に興味があったからだ。

真咲が「うん」と頷くと、行成は「おう、じゃすぐとってくるな」と言っただ傘を開いてバス停を出た。

雨はまだ、止みそうにない。

藍色 (3)

行成はものの5分ぐらいでバス停へと戻ってきた。本当にこの近くに住んでいるようだ。

ビニール傘を手渡され、水たまりを踏まないよう気をつけながら歩く。途中、同じ学校の誰かに見られやしないかとびくびくしたが、そんなことを思っている間にアパートへとすぐ着いてしまった。

表札に右下がりの可愛い字で「矢野」と書いてある。彼のフルネームは「矢野行成」だと知った。

「汚いけど、ま、上がってよ」

行成について玄関で靴を脱ぐ。

外観は古びていてお世辞にもあまり立派とは言えなかったが、その分部屋の中は案外広々としていた。台所も二口コンロがちゃんと設置してあり、深い流しはきれいに磨かれていた。飲み干したビールの缶がゴミ袋いっぱい詰まっているのが、「らしい」といえるらしい。

台所とガラスの引き戸で区切られた部屋の中は、たくさんの本や服などで散らかってはいたが、不潔な印象はなかった。だけれども畳に敷きっぱなしになっている布団と、その上に脱ぎ散らかしたTシャツとぐしゃぐしゃに丸められた肌掛けが放置されているのが目に入ったとき、何故だか見てはいけないものを見た気がしてドキッとした。

「これで体を拭け」とタオルを差し出されたので、ありがたく使わせてもらう。紺色の無地のタオルは、柔軟剤の強い花の香りがした。

部屋の真ん中に置かれたテーブルの前に正座すると、向かい側に

座った行成が、裏地がオレンジ色の黒いてかてかした生地 of 鞆の中から紙の束を取り出し、それをドサツとテーブルの上に置いた。その1枚目を真咲に向かって差し出すと、濃いピンク色の水性ペンで右端を指し示しながら言った。

「この欄の点数、全部足して上に書いて」

真咲が任されたのは、大問ごとに出された点数の、最終的な合計を出すことだったようだ。これは間違えられないぞ、と妙に気合いが入る。

電卓をつかうかどうか聞かれたので、「いい」と首を振る。二桁同士の足し算ぐらいなら暗算でもできるし、その方が早い。

雨音が響く中、黙々と作業を進める。途中で行成がやっている正誤判定に追いついてしまったので、小問の合計も真咲がやることになった。

「終わったよ」と声を掛けると、点数を表に書き込んでいた行成が顔を上げてこちらを見た。

「おお、サンキュ。助かったよ」

屈託のない少年のような笑顔。見ていると言いやうもなく落ち着かなくなってくる。

行成は「……いしょ」と言って立ち上がると、首をぐりぐりと動かしながら尋ねてきた。

「あのさあ、ホットケーキ好き？」

うん、と頷く。たいていの甘いものは好きだが、ホットケーキは格別だ。……と言うか、世の中にホットケーキを嫌いな人なんてい

るんだろうか、と真咲は思う。

すると行成は流しの下扉を開けて、大型のボウルとかき混ぜ器、それと冷蔵庫から牛乳と卵、粉などを取り出した。

「俺、これだけは作るの上手いんだ。実物見てビビんなよ」

そう豪語すると材料を次々に量っては混ぜていく。真咲は横でその様子をボーッと見ていた。

やけにあっさり混ぜ終わったな、と思ったら、今度は手慣れた様子でフライパンを温めだした。「マサキ、お茶の用意して」と言われたので、ヤカンに水を汲んでもう一つのコンロに置いた。

皿を用意したりテーブルの上を片付けたりしていると、いつの間にかホットケーキが焼き上がったようだ。

どん、と黒い皿の上のにつけられたきつね色のケーキを見て、真咲は思わず「わぁっ!」と声を上げた。

「すごい、これどうやって作ったの?」

まるでパッケージの見本の様である。表面はつるつるとしていて穴がほとんど開いておらず、型でも使ったかのように分厚い。自分で何度か作ったこともあるが、このように完璧に近い形で焼き上がったことなどまずない。

「あんまり混ぜすぎないのがポイントかな。あとは弱火でじっくり焼くこと」

行成が得意げに答える。しばらく出来映えを眺めていると、行成は「そんなにか?」と苦笑してそれをナイフで二つに分けてしまった。

片方を別の皿にのつける。バターをその上に落としてから、行成

がこちらを見た。

「はい」

ごく自然に大きい方を差し出されたので、真咲は「いいよ、そっちもらうよ」と断った。すると彼は早々にケーキをパクつきながら言った。

「男同士で遠慮なんかすんなよ。たくさん食わねーと大きくなれねーぞ」

……やっぱりな、と真咲は思った。行成は自分の性別を誤解している。初めて会ったときから異性に対するにしては（いくら子供とはいえ）ぞんざいな態度だとは思っていたが、それは同性に対する気安さから来るものだったらしい。

確かに自分の服装は男の子に見えなくもないが、それでも半分ぐらいの人はちゃんと気づく。それなのにこの人は、自分が男子児童だと信じて疑いもしていないようだ。今日のランドセル姿を見て決定的になったのかもしれない。

だからといって今ここで訂正するのも……と思う。自分が女だと知ったら妙な空気になりそうだし、ヘタしたらこのまま追い出されかねない。外はまだ雨が降っている。せめて今日ここから出るまでは知らんぷりを通しておくことに決めた。

「ユキナリさん」

「あ？」

「ホットケーキ美味しいね」

にこにこしながらそう言うと言行成も同じように頷いた。
穏やかな時間が流れる。行成が幸せそうにモノを食べる様子を見

ていると、こちらの心まで暖かくなっていくようだ。
騙している、という気持ちは少しもなかった。

藍色（４）

行成が食器を洗っている間、手持ち無沙汰になり部屋の中を見回した。

そこで、机の脇の壁に貼ってあった図面に目がとまった。

大きな月の写真だ。さっきまでは背中を向けていたので貼っていることに気が付かなかった。夜空に浮かんでいるそれには、各クラスターごとに線がひっばってあって英語で名前が書いてある。

何気なくとそれを見てみると、いつの間にか洗い物を終えたらしい行成がすぐ後ろに立っていた。

「なに、これが気になる？」

こんなものに興味を持つとは珍しい、と言わんばかりの口調だった。

真咲は頷くと、静かに答えた。

「……月にはうちの父さんが住んでるんだ」

バカにされる、とは思わなかった。この人は、きっと話を聞ってくれる。

案の定、行成は「はて」と首を傾げると、真咲に向かって大真面目に尋ねてきた。

「どういうこと？ オヤジ、宇宙飛行士なの？」

首を横に振る。

「去年、死んじゃったんだけど、亡くなる直前に『月に行ってくる』って言ってたんだ」

行成は一瞬顔を強ばらせたが、すぐに「ああ」と相づちを打って話の続きを促した。

「で、前まで住んでた所引き払って4月にこっち来たばかりだから、この前は迷っちゃって……」

「なるほどな。で、マサキ、兄弟は？」

「いる。けど、ねーちゃんは海外に留学してて、にーちゃんは仕事でどっかの島にいる」

沈黙が訪れる。行成は自分よりも過酷な境遇にいる年下の子供に對し、どういった言葉を掛けたいのか見つからないでいるようだ。

だけれども、真咲の方としても、特に同情を引きたかった訳でも、慰められたかったわけでもない。ただ、自分のことをもっとよく知ってもらいたかったただけだ。

真咲は気まずい空気を打ち消すようにわざとちよろちよろと動き回った。そこで、机の上に見慣れないガラス瓶を見つけ、それに近づいてから指をさした。

「ユキナリさん、これは？」

真咲の質問に、行成が「さん付けしなくていいよ」と前置いてから答える。

「これは『透明骨格標本』って言って、サカナの身の部分を薬で溶かして、骨だけ取り出して色付けたやつだな」

「へー……、キレイ」

ガラス瓶の中には、見事に着色した魚の骨がぷかぷかと漂っていた。まるで透明な海を泳ぐ魚の幽霊のようなそれは、骨の色が青よりも濃くて闇に近い――真咲の好きな藍色だった。

口を開けて見とれていると、行成が首の裏を搔きながら言った。

「まだ試料あるけど、作ってみる？」

「これって作れるの？」

「あ、ああ。これはデカいから2ヶ月ぐらいかかったけど、メダカみたいな小さいのなら2週間ぐらいでできるぞ」

「どうやって？」

興味津々で行成を見上げる。すると彼はガラス瓶を手にとって説明し出した。

「まずはその辺で釣ってきた魚をホルマリンに漬けてだな」

「えっ、生きたまま漬けちゃうの？」

真咲が急に驚いたような声をだしたので、行成は「しまった」と思いつつ返した。

「……一応。死んだのでもできるけど」

「ふーん……。ちょっと可哀想だね」

そう言う気持ちも分からなくもない。真咲はまだ「生き物の死」というものについて敏感になっているんだろう。

行成にしてみても、標本を作る際ゆっくりと弱っていく魚を見ながら、済まないことをしていると気分を何度となく感じた。

行成は「まあ、気が向いたらいつでも言えや」と言っ瓶を机の上に再び置くと、真咲に座るよう促した。

その後は、「好きなことしてろ」という行成の言葉通り、彼の部屋にあった雑誌やマンガを勝手に読ませてもらった。彼は難しい顔をしてラップトップの画面を睨んでいたが、真咲が「うわ」とか「えっ」などと本の中身に反応するたび、「どれどれ」と顔を近づけて真咲が読んでいたものを覗き込んできた。その行動がなぜか嬉しくて、大してウケたわけでもないのに大声で笑ったりもしてみた。まだまだ帰りたくないな――、そう思っていたが、行成が壁に置かれた時計を見て、焦ったように口走った。

「やべ、もうとつくに6時過ぎてっぞ」

俺もいまからバイトなんだよ……とカバンに荷物を詰め始める。慌てたその様子を見て、真咲は時間を教えなかったことをいたく後悔した。

追い立てられるようにして玄関から出ると、行成が「ちよっと待て」と声を掛けてきた。

「まだ雨降ってるから、傘持ってけ」

白い柄のビニール傘を差し出される。行成は自身も靴を履きながら、カバンを小脇に抱えていた。

「それじゃ、今度返しに……」

「いや、いいよ。それぐらいやるよ」

そう言っただアノブに鍵つつこんで回した。ひどく急いるようで、彼は「それじゃ」と言うと、真咲の方を振り返らずに駅の方へ早足でアパートの階段を駆け下りた。

紺色の大きな傘が遠くなる。完全に見えなくなると、真咲はため

息をついてビニール傘を払げてアパート前から立ち去った。

雨は夜には上がり、都会の夜空にもぽっかりと円い月が昇った。

しかし真咲は、今日はいつものように空を見上げる気にはならなかった。

（『そんなじゃ、さ。ちょっとお前うち来る？』）

行成の声が耳にこだまする。自分はその誘い通り、行成の家で何時間か過ごしてしまった。

なんだかよく分からないけど未だにドキドキする。だけどきっと、誰かに知られたら台無しになってしまいそうな気がする。

だからこのことは、絶対に秘密にしたい。母親はもちろん、友達にもおじさんにも、そしてお父さんにも――

その日は、引っ越してきてから月に祈らなかった初めての日になった。

梅雨明けの街 (1)

はじめめとした長い雨が上がり、本格的な夏のシーズンの到来を予感させるようにカラッと晴れ上がったその日の夕方、プールの授業で疲れた体を休めるため居間のソファで真咲がまどろんでいると、庭先からがさがたと物音が聞こえた。

慌てて飛び起きると、庭に植えられたプラムの横にいつの間にか脚立が置いてあり、その実を何者かがもぎ取ってはバケツへと放り込んでいた。驚いて思わず声を上げてしまいそうになったが、よくよく見ると、その果実泥棒は叔父の忠晴に似ている———というか忠晴本人だった。

掃き出し窓をガラリと開けて、庭へ出る。つかかけのサンダルを履いて脚立に近寄ると、叔父は真咲を見下ろして「おお」と破顔した。

「真咲、今年のプラムは当たりだぞ」

そう言って赤い実をひとつ採って真咲に手渡した。「食べてみる」と言われたので皮を剥いて歯をあてがう。ほんのりと酸味の漂う甘い果汁が口の中いっぱいに拡がり、寝起きのだるい体にしみこんでいくのが分かった。

何か手伝うことはないか、と聞くと、実を拭いて並べるように言われた。台所へ一旦戻りキッチンペーパーを何枚か持ち出し、縁側に座って作業にとりかかった。

拭きながら熟した実とまだ青さが残ってる実を分けていく。脚立を移動し黙々とプラムをつみ取っている叔父は、会社帰りで疲れ果てていたってよさそうなものののに、実にいきいきとして見えた。

母より7、8歳若い叔父は、「ジョージョー企業」に勤める「エリート社員」なのだとか聞いたことがある。背が高く彫りの

深い顔立ちで、「小さい頃から女の子の影が絶えなかった」とは母の弁である。それなのに未だに独身で、早く落ち着いてくれればいいのに、と母はことあるごとに愚痴っていた。

叔父自身はマンション暮らしをしているが、庭いじりをするため、月に2、3度は真咲の家へ草刈りや肥料捲きをしに現れる。放置気味だったプラムの樹が見事結実するまでになったのも、叔父の世話があつてである。（もともとこの家は祖父母のも物だったが、「年寄りに階段は堪える」とのことで、二人は現在公団暮らしをしている。一軒家をもてあましていたところに、娘と孫である真咲たちが収まったという格好だ。）

真咲にしてみれば自分をからかってくるところが少々苦手だったが、度々会っているうちにそれも馴れてきた。親しくなれば、気さくでいい人間なのだ。

「ねー、おじさん」

叔父が振り返りもせず「なんだ」と答える。

「今日も、家に帰っちゃうの？」

「……ああ。仕事はまだあるから。帰るよ」

「だったら、いっそのことうちに引っ越してくればいいのに」

叔父は真咲の言葉に一瞬手を止めたが、「バカなこと言ってんな」と言うとすぐにプラムの採取を再開した。

しかし、今家には使っていない部屋があるし、ここに住めば庭だって好きなだけいじれる。わざわざ別に暮らししているのが無駄なんじゃないか……と真咲は思うのだ。

真咲は「えー、でも」と付け加えてから、反論に出た。

「きつと、ガリレオだってその方が喜ぶよ」

叔父の飼っている犬のことを持ち出す。狭いマンションではきつと十分に走り回ることもできないに違いない。叔父もあまり散歩に連れて行けないようだし、もし一緒に暮らしていたら、自分が遊んでやることもできるだろう。

すると叔父は苦笑いをして答えた。

「いい歳こいた男が親とか兄弟と住むのも変だろ」

「でもさ、うちお母さんいないこと多いしさ。いてくれたら嬉しいんだけど」

それは真咲の本音だった。最近本格的に仕事に復帰した母は、夜勤などで長時間家を開けることも多い。

寂しい、と泣く歳でもないが、誰かが一緒にいてくれるのならその方がいい。ずっといい。

脚立から真咲を見下ろしていた叔父は、ぼんと地上に降り立つと、プラムのぎっしりつまった重そうなバケツを持って真咲に歩み寄った。

「なんだ？ お前がそんなこと言うなんて珍しいじゃないか。やっ
と俺の良さがわかったか」

はぐらかされて真咲は慥然とした。そんな彼女に構うことなく、叔父は予め用意していたらしいビニール袋へプラムを詰め始める。縁側に並べられたプラムをあらかた詰め終わると、それを指し示しながら真咲に言った。

「これはあとでじーさんとばーさんの方に持っててくれ」

明日は母と祖父母の家で週一恒例となっている食事会の予定だ。

その時に一緒に持っていけばいいだろう。

しかしプラムの実はまだバケツいっぱいに残っている。叔父がその上のほうから「それじゃ、俺はこれぐらい」と3、4個だけ手に取ったので、

「残りは？」

そう真咲が尋ねると、叔父はさも当然というように、

「お前とかーちゃんの分だろ」

真咲の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

ふたたびバケツの中へと目を落とす。プラムは今にもこぼれんばかりに赤く熟したもの、まだ青く固そうなもの。さまざまな色合いのものがあつたが、見えているのはごく一部で、一体この中に何個あるのか真咲には見当も付かなかった。

「二人じゃこんなに食べられないよ」

きつと母と自分だけでは食べきる前に腐らせてしまう。せつかく収穫したのに無駄にになってしまうのは可哀想だ。

叔父にもっと持って行け、という意味を込めて言ったはずの台詞は、またもや飄々とした調子ではぐらかされた。

「じゃあお前の友達にでも持ってけば。喜ぶと思うよ」

「友達……」

言われても思い浮かばない。こんな庭先で採れた果実を学校の知り合いに押しつけたところで、迷惑がられるだけな気がする。

叔父が「いい仕事をした」とばかりに大きく伸びをした。夕陽を

受けて庭の地面に落ちた長い手足の影が、ある人物のそれを彷彿とさせた。

（あの人だったら、よろこんでくれるかな）

プラムの入ったバケツを台所に運ぶと、そのうちの10個ほど、あまり傷の付いてない見栄えのいいものを選んで紙袋に詰めた。

自分の部屋に駆け上がると、クローゼットを開け、誰にも見えなように置いてあったビニール傘を取り出した。

突然の雨に降られたあの日、再会した親切的な青年から借りた傘。

「やるよ」と言われたが、いつか返しに行こうと思っていた。だけど、手放してしまったら今度こそ本当に縁が切れてしまいそうで行けなかった。

（これのお礼です、って言えば、また少しはお話できるかな）

ビニール傘の柄をぎゅっと握りしめる。先日見たことわざ辞典に載っていた「思い立ったが吉日」という言葉を思い出した。

この気持ちは何なのかは分からない。だけれど、あの男の人と一緒にいると、ホッとするし、楽しい。遠足の前の日みたいにわくわくする気分。ずっと続いてほしくて、時計が止まってしまえばいいって本気で思った。

プラムの酸味のある甘い味が、口の中に蘇ってきた気がした。

梅雨明けの街 (2)

数週間前の記憶をたどって、くたびれたモルタル造りのアパートの前までやって来た。

一旦家に帰ったからランドセルはない。手には以前借りたビニール傘と、袋いっぱいにつめられたプラムの実だけを持っていた。

扉の横のチャイムは「♪」のマークが薄汚れて消えかかっていた。繋がっているかどうか分からないそれを恐る恐る押してみると、中から「キンコン」というような古めかしい音が聞こえてきた。

しかし、扉の内側からはそれ以来一切物音がしない。

「……やっぱいないか」

ため息をついて俯いた。やはり大学生といえど、平日のまだ陽も沈みきつてないこの時間に家に居ることはなかったようだ。

扉に背を向けて寄りかかる。行成の住んでいるアパートは幸いなことに大通りから外れた静かな住宅街にあり、その前を通る道路は交通量が少なく、たまに買い物帰りの主婦や散歩をする老人が歩いて横切る程度である。真咲は「お腹が空くまで待って来なかったら帰ろう」と決めて、そのまま部屋の前に座り込んだ。

向かいの家の垣根から、空に向かって真っ直ぐ伸びるタチアオイの木が見えた。その中心に沿って絡みつくように連なって咲いている赤い花は真夏の太陽に似ていて、これから来る季節を真咲に嫌が応でも思い起こさせた。

本でも持ってくれば良かったな、と思いつつ行成を待つ。チリ……チリ……とどこかで揺られている風鈴の音だけに耳を澄ませていた。

そのうち西の空にたなびく雲が次第に赤みを増してきた。そうい

えば、往来を行く人の中にも、会社帰りとおぼしき人の姿がちらほら混じりだしている。時計を持っていないので時間は分からないが、もう1時間以上は経っている気がする。

道を歩いていたひとりの老婆が、アパートの前で動かない真咲の姿を見て、不審げに振り返った。もしかしたらずっと真咲がここに居ることに気づいたのかもしれない。

(……変に思われたかな)

そう思うと途端に焦ってくる。お巡りさんでも呼ばれたら大変だ。早く帰らなきゃ、と腰を上げた瞬間だった。

突如、部屋の中からがちゃがちゃと金属が擦れるような物音が聞こえた。

咄嗟のことで身を強ばらせていると、それまで自分がもたれ掛かっていた扉が出し抜けに開いた。

「あっ！」

玄関を開いた人物は、すぐ外に立っていた真咲を見て飛び退いた。

「お前、ずっと待ってたの？」

真咲は行成の問いに頷くこともできず、

「えーと、さっきチャイム鳴らしたんだけど、出てこなかったから」

と、言い訳がましく答えた。

行成はうろたえたように口元を歪めた。以前会った時よりも表情が乏しく、顎や鼻の下には点々とた髭が生え、疲れているのか目の下が落ち窪んでいた。縋れた半端な袖丈のTシャツにスウェット地

のハーフパンツという出で立ちで、まるでさっき起きたばかりです、と言うような格好だった。

……いや、本当に今の今まで寝ていたのかもしれない。

ああ、悪い、と行成は頭を掻くと、真咲の顔をじっと見つめた。その体からは、ほんのりと酒の匂いがした。

「これ、ありがとうございました」

しどろもどろになって傘を差し出すと、行成は戸惑ったように顔を俯けた。

「そっか。そんなの玄関の前に置いてってくれればよかったのに」

「あ、あと、この前のお礼に、これ持ってきたから」

「なんだこれ。梅？ 桃？」

行成は真咲に渡された紙袋を開け、視線を落とす。

「プラム、だよ。うちの庭先で採れたんだ」

ふーん、と頷く。玄関の扉が再び閉じられていく。やはり突然押しかけたのは迷惑だったかと後悔していると、狭くなったドアの間から、行成の急いたような声がした。

「とりあえず中入れば」

「えっ？」

「食ってくだろ？」

あまりにも当たり前の様な態度に、真咲は多少面食らいつつも、遠慮がちに答えた。

「でも、ユキナリに持ってきた分だし」

「いや、こういうのってひとりで食っても美味くねーじゃん。一緒に食おうぜ」

長年連れ添った友達のように気安い物言い。それに行成の顔色が悪いのも少し心配になり、真咲は再びアパートの玄関を跨いだ。

実は家で飽きるほど食べた、というのは内緒にしておくことにした。

梅雨明けの街 (3)

部屋の中へ入ると、酒の香りがより一層濃く漂った。

それもそのはず。テーブルの周りにはビールの空き缶がいくつも転がっており、さきいかやかまぼこなどの包み紙も散乱していた。以前訪れたときも整頓されているとは言い難い部屋だったが、今回のそれは明らかに「汚部屋」と言っているいい有様だった。

「うわー……、こりゃひどいな」

自室惨状を改めて目の当たりにし、行成が呻く。

「何かあったの？」

「いや、まあ……、大人にはいろいろあるんだよ」

バツが悪そうに顔をしかめると、行成はテーブルの上に開きっぱなしだった白い紙と封筒をぐちゃりと握りつぶし、食べ散らかしものとも部屋の隅にあったゴミ箱へと放り込んだ。

この部屋の状況を見ても、だらしない人間だ、とは思わない。彼の言うとおりで、いろいろと子供には分からない事情というものがあるのだろう。真咲は彼に倣って、空き缶などを適当に分別してビニール袋に詰めていく。

あらかた片づく、行成はプラムを切り分けるために台所へと向かった。

手持ち無沙汰になった真咲は、ついでに部屋中に散乱していた本を本棚に並べ直した。余計なお世話かな、と思いつつ脱ぎっぱなしだった衣類を畳んで、ぐちゃぐちゃになった布団もきちんと皺を伸ばした。

皮を剥いたプラムを手にした行成が部屋の中に戻ってくると、「うわ、すげえキレイになってる」と驚嘆の声を上げた。

冷えた麦茶と、剥きたてのプラムがテーブルの上に並べられる。そのうちの一つにフォークを刺し、滴る果汁をトントンと切つてから、口へ運んだ。

顎を動かして飲み込むと、行成は相変わらずの無表情のまま呟いた。

「ああ、これか。昔ばーさんの家で食ったな」

「あ、ホントに？ おばあちゃんも家でつくってたの？」

「いや、多分ご近所さんからのお裾分けだったんだと思う。果物やら野菜やら、いつもたくさんもらってたよ」

「へー、羨ましいね。どの辺に住んでるの？」

「北陸の山の中だよ。ガキの頃は毎年夏になると行ってたけど……。最近顔も出してねえな」

臉を伏せて遠い目を見ると、「まあ、こんなじゃ合わせる顔もないけど」と自嘲気味に笑った。

……それは、どういう意味なのだろうか。そういえば、初めて見たときもベンチの上にうずくまったりして、何か深刻な悩みを抱えていそうな雰囲気だった。

だけど、自分が聞いているのか……、と考えていると、先に口を開いたのは行成の方だった。

「お前はいいよなあ」

「えっ？」

「やりたいこと、いっぱいできるし、まだまだこれからだもんなあ」

真咲はムツと顔を顰めた。正直、小学生だってそこまでお気楽で

はない。特に自分は、父を亡くし友達も出来ず、羨ましがられるような境遇にはいない。

反論しようとするより先に、行成は「ごめん、なんでもない」と言って再び俯いてしまった。

生暖かい風に乗って、開け放した窓から子供達のはしゃぐ声が届いた。酸っぱいプラムを食べきってしまうとすることが無くなり、気まづくなって真咲は話題を振った。

「そういえば、どこか出掛けるところじゃなかったの？」

先ほどのこと。家の中から勝手に扉が開いた。あれは外に用事があったからではないのだろうか。この前のように自分のせいでバイトに遅れたりしたら大変だ……そう思って尋ねる。

「あ、ああ。夕飯の買い出しだし行こうと思ってたんだわ。日も暮れそうだし、そろそろ行くか」

大した用事でなくてよかった……。そう胸をなで下ろしたのもつかの間、行成は麦茶を飲み干すと、急にテーブルの前から立ち上がった。なんだか唐突な行動である。呆氣にとられた真咲は、慌てて背中に向かって声を掛けた。

「どこ行くの？」

「駅前の商店街。あの辺、総菜とかが安いんだよ」

部屋の中を「財布、財布」と、うろうろしている行成に、真咲は思い切って聞いてみる。

「着いてっていい？」

行成が真咲を振り返って、「ああ」と頷いた。

真咲は着てきたパーカーを急いで羽織ると、運動靴を履いて行成より先に玄関を出た。

ふと空を仰ぎ見ると、太陽の沈んで行く方角に、一つだけ光る星を見つけた。

月は、まだ出ていない。

梅雨明けの街 (4)

駅前から数100メートルに渡るアーケード下の商店街には、飲食店をはじめ洋品店、楽器店など、大小様々な店が連なっている。夕暮れ時ともなれば行き交う人々の波で活気に溢れるのだが、今日は特に賑わっている気がする。

その理由をいち早く察知した行成が、隣を歩く真咲に向かって呟いた。

「もう夏祭りやってんのか。早いな」

通りの真ん中に、軽食などの露店がいくつも出店している。普段は母親に止められているためあまり買い食いなどをしない真咲だったが、別に何も買わなくてもこのような催し物を見ると心が躍ってしまう。

尤も、真咲よりもこの雰囲気を楽しんでいるのは、彼女よりうんと年上の、隣を歩く青年のようだったが――

「チョコバナナかりんご飴、食う？」

弾んだ声で尋ねられ、真咲は首を振る。

「お母さんがご飯作ってくれてるから、今日は大丈夫」

それに、家の近くまで送ってもらったり、傘を貸してくれたり、お世話になっているのはこちらの方なのに、これ以上恩を受けることはできない。

すげなく断られ、行成は不服そうに口をとがらせた。

「そっか」

……もしかしたら、お裾分けでももらう算段でいたのだろうか。行成のこういうところが、自分の知っている他の大人の人たちと違って、たびたび自分を戸惑わせるんだろうな、と真咲は思った。

前方から綿菓子を持った5、6歳ぐらいの幼児が突進してきた。ぶつからないようにひらりと身を避けると、行成とはぐれてしまいうそになった。

行成が「こっちだ」と言って真咲の手を取る。

彼の手のひらはがさがさしていて、大きく、それでいて少し冷たかった。

そのまましばらく歩いていると、天ぷら屋の前を過ぎたところで行成は急に足を止めた。

「おっ、金魚すくい」

半畳ほどの浅い水槽の中に、オレンジ色に近い赤の金魚が、長い背びれをひらひらと揺らしながら何匹も泳いでいる。よく見るとたまに黒いものも混じっていた。真咲よりもいくらか年若い女の子二人組が、真剣な表情で網を片手に水槽の前にしゃがみ込んでいる。

この子達は上手くすくえるかな、と後ろからその様子を伺っていると、金魚を水槽の角に追いつめたところで、女の子達の網は無惨

にも破れてしまった。

「あー、残念」

まるで自分のことのよう悔しそうに行成がため息をついた。

女の子達は「はい、オマケ」と店番らしき中年女性から一匹ずつ金魚をもらうと、満面の笑みを浮かべ、そのままどこかへと駆け出した。

行成が尋ねる。

「お前、こういうの得意？」

「やったことないからわかんない」

そうなのだ。年の離れた兄妹や両親など真咲の周りには合理的な考え方をする大人が多く、こういった遊びを「やってみたい」となどと口に出すのはなんとなく憚られる感じがして、結局一度もやらないままこの年になってしまった。

行成は「あ、そうなの」と意外そうに眉を動かして、水槽の前に座り込んだ。

ポケットから財布を取り出すと、お金と引き替えに網を受け取り、その網を真咲の方へと差し出した。

「はい」

「えっ」

「いいからやってみなっ。何事も経験だよ」

にやにやとしながら手に網を押しつけてくる。断り切れず真咲は、行成の隣にしゃがんで水槽の中を覗みつけた。

一匹、周りの魚たちに較べて動きの鈍い奴がいた。所狭しと泳ぎ回る金魚が多い中、そいつだけのろのろと白いプラスチックの池を

漂っている。

それに狙いを定めて、壁際に寄った隙に網をくぐらせた。捕れた！と喜んだのも一瞬、案外大きかったその金魚はうすい網の上を跳ね回り、お碗の中に入れる寸前でぼとりと水の中に落ちてしまった。

「……やっぱりダメだったか」

あともう一步のところだったのに。逃げた金魚を未練がましく視線で追ってしまう。

名残惜しいけど仕方がない。諦めようとしたとき、隣の行成が急に袖を捲って宣言した。

「よし、今度は俺がやる」

……結局、自分がやってみただけではないだろうか。それなら最初から自分だけチャレンジすればいいのに、と思ったが、真咲も生まれて初めての金魚すくいを結構楽しんでいたので、何も言わず行成の狩りを見守った。

隣の行成は、先ほどまでのどんよりした表情が一変、今は活き活きと目が輝いている。

行成は水槽に向かって前のめりになると、網と鉢を持って口を固く結んだ。

網を水面すれすれの所で待機させてタイミングを伺う。エサと勘違いしたのか上部に何匹か集まってきた。キツと目つきを鋭くさせると、素早い動きで金魚を水の中から攫った。

間髪入れずにそれをお碗の中へと滑らせる。

「やった！！」

「よっしゃ！ ゲット！」

行成が笑顔でガッツポーズを作った。

掬うと同時に網は破れてしまったが、お碗には今しがた捕獲したばかりの金魚が二匹、ぴちぴちと動いている。

「すごい、やっぱ上手だね」

「いや、そんなんでもねえよ」

謙遜するように鼻をならす……が、顔は嬉しくて仕方がないといったように緩んでいる。「の」の形をした奥二重の眼が、ますます細く狭められた。

「あー、赤いだけ狙ってたのに、おまけがいる」

お碗の中を覗き込む。目当てだったのは赤い金魚のみで、黒くて一回り体の小さいものは巻き添えを食らってしまっただけらしい。金魚にとっては災難かもしれないが、自分たちにはラッキーと言えるだろう。

それを店番に手渡した。二匹の金魚は透明な巾着状のビニール袋に移し替えられた。

立ち上がって店番に礼を言うと、行成は金魚の入った袋を、ごく自然に真咲に差し出した。

「はい」

「えっ……、もらっていいの?」

意外な行動にきょとんと顔を見上げた。あれだけ一生懸命やっていたのは、よっぽど金魚が欲しいのかと思って見ていたのだが、そうではないのだろうか。

「ああ。俺、ズボラだし、きっと多分すぐ死なせっちゃうから。お前が持って帰って世話してくれよ。名前でも付けてさ」

あの自宅の散らかりぶりを見れば、生き物を飼える状態じゃないというのは分かってもらえそうなのだが。

それでもまだ納得できないでいる様子の真咲に、行成は背を屈めて顔を覗き込み、その手をとって無理矢理ビニールを握らせた。

「んで、子供が生まれたら引き取るからさ。頑張って育てるんだ」

急に手を掴まれ、耳の後ろがカツと熱くなる。照れていることを気づかれたくなくて、「わ、わかった」と頷くしかできなかった。

ビニール袋を目の高さまで持ち上げる。水の中で、鮮やかな朱赤と濁りのない漆黒の小さな生物が絡みつくように踊っている。

「それじゃ、赤い方がうめぼしで、黒い方がこんぶ」

「お前、案外食い意地はってるのな」

真咲が直感的につけた名前を、どっちもおにぎりの具だろ、と行成は声を立てて笑った。

行成は近くの弁当屋で酢豚とサラダを選んで、当初の目的だった夕飯の買い出しを済ませた。

他愛のないことで笑いながら、日の暮れてしまった街を子供の歩幅に合わせてゆっくりと歩く。行成の髭の生えた白い肌とシャツが、夕闇に溶けずに浮かんでいた。

家の途中まで着くと、「またね」と手を振って別れた。手にぶら下げた金魚が増えたときのことを想像しながら。そうなったら真っ

先に会いに行こうと決めた。

その日の夜、真咲は夢を見た。

ごつごつした岩の多い海で。服を着たまま、尾びれの付いた足で縦横無尽に陸へ向かって泳いでいた。

水の中では、その日捕まえた二匹の金魚と彼らとよく似た子供たち、それと骨だけの青い魚がたくさん泳いでいて、何回もすれ違った。

目指す場所に待っている人を焦がれながら。息をしようと顔を上げると、外は闇に包まれていた。

空には大きな星が半分だけ浮かんでいた。深い青色を地に、緑と白のマーブル模様の星。あれはどこかで見たことがある。

あの星は地球だ。だとしたら、ここは――

そう考えた瞬間、鮮やかな夢は終わった。

最後の夏休み (1)

ミーン、ミン……と威勢のいい蝉の鳴き声がやたら耳に付く。もしかしたらすぐ近くのベランダで鳴いているのかもしれない。

今日の真咲は、学期の終了に伴う三者面談をするため、母親と共に学校へ来ていた。

最近では二学期制の小学校も多いと聞くが、真咲の通う学校は転校前も今も三学期制だった。従って、夏休み前のこの暑い盛りにも、通知票を受け取ることになる。

「……では、卒業後は私立の中学への進学を予定されていると」

前に座った担任教師がハンカチで額の汗をぬぐう。クーラーのない教室では旧型の扇風機が首を振り続けているが、それでも一向に涼しくはならない。

母親よりもいくらか年若い女性の教師は、他の児童たちからは「いい先生」と言われ人気があるようだ。もつとも、教え方がうまいとか尊敬できるとかではなく、ただ「怒らない」「怖くない」から他の教師よりも自分たちが好き勝手なことをしやすいというだけではないだろうか、と真咲は思う。

珍しくスーツを着込んだ母親が答える。

「ええ、本人もそう望んでいるようですし」

望んでいるわけじゃない、そう反論しかかった。

自分は、期待に応えるためにそうするだけ。確かに、公立の中学に進学すれば大部分が今の同級生と重なってしまう。そういった環境から逃げたいというのもあるけれど、大部分は「お父さんの子供なんだから勉強ぐらいできなきゃ恥ずかしい」という母親の発破が

あつてこそだ。

担任教師は人の好きそうなふっくらした顔を崩して、笑顔を作った。

「真咲ちゃんの成績であればどこでも狙えると思います」

母親が勝ち誇ったようにニヤリとした。受け取ったばかりの通知票に目を落とすと、最高評価の「◎」がずらりと並ぶ。（と、言ってもこの学校は「◎、○、△」の3段階のため、全て「◎」を取るのもさほど難しいことでは無かったが。）

各教科の項目ごとの小テストでは満点以外とったことがないし、先日受けた模擬試験でも何校か挙げた志望校はすべて合格の範囲内だった。もともと記憶力は良く地頭も悪くなかったが、ここ最近は、転校前まで外で遊んでいた時間を全て勉強に宛てて努力もしている。がんばってね、と教師が真咲の目を見て励ました。照れくさい半面、今もすでに頑張っているのにこれ以上どうしたらいいのかという戸惑いを覚える。

「それでは以上になりますが、何かご質問は」

教師に尋ねられ、母親が「いいえ」と首を振る。

ありがとうございました、とお互いに頭を下げて立ち上がろうとしたとき、教師がこれだけは、とばかりに付け加えた。

「あと、2学期には、もっと友達ができるといいね」

急に顔が熱くなってくる。真咲は小さな声で「はい」とだけ答えると、母親に急かされて教室を後にした。

廊下に出ると、母親は恥を掻いた、とでも言うように真咲を睨みつけた。

強い太陽光に照らされ、濃い影が歩道に落ちる。しかし明後日から夏休みだというのに一向に気分は晴れない。

それまで無言で歩いていた母子だったが、国道を横切る歩道橋を降りきったところで、母親が業を煮やしたように口を開いた。

「あんた、まだ友達作ってないの」

否定することも頷くこともできない。喋る相手なら、いる。

クラス委員の女の子は真咲が完全に孤立しない程度には話しかけてくれるし、他の子からもあからさまにいじめられている訳ではない。

だけど、それを友達と呼んでいいのかは分からない。それに、「友達を作る」という言い方になんだかモヤモヤする。

友達は無理矢理作るものじゃなく、自然となるものはずだ。

真咲が言い返せずにいると、母親は一層苛立ちを募らせた。

「なんでもっと周りに合わせられないの？　なんでそんなに頑固なの？」

合わせようとしてない訳じゃない。

ただ、きっかけが掴めないんだ。多くの女の子が盛り上がっているテレビや漫画や恋愛の話題——それらにどうしても興味が持てないから、話しかける糸口が見つけれない。それだけのことなのに、どうしてそんなに大罪を犯したかのように責められなければいけないのか。

それに——自分だって、前にいた場所では「いつまで経っても馴染めない」とこぼしていたではないか。周りに合わせられないのは同じはずなのに、どうして分かってもらえないのだろう。

上手く言い表せずにもどかしく唇を噛みしめる。そんな真咲を一瞥すると、母親は吐き捨てるように冷たい声で言った。

「勉強だけ出来たって、あんたみたいな子は将来苦労するわよ」

耳の後ろが殴られたかのように熱くなる。

（せっかく一生懸命頑張ったのに、少しも褒めてくれないの？）

分かってる、世の中にはいくらいい学校を出ても、暗い人生を送る人間もいる。その逆に、多少勉強は出来なくても、いい仲間に出まれて、充実した一生を過ごす人もいる。母は、自分がその前者になると言いたいのだろう。

だけど、つい先刻「成績がいい」と言われて母親も喜んでいたではないか。それなのに、どうして手の平を返すようなことを——

ギィ、と家の門をくぐる。炎天下の中歩き続けたせいで汗だくだけど、目尻から流れたのは、汗ではなかった気がする。

母親は疲れた、と言って冷房の中少し横になると、昼も食わずにすぐに仕事へ向かってしまった。残された真咲は自らそうめんをゆでて腹を満たした。

シャワーを浴びて二階の自室に上がると、壁際の5段チェストへと歩み寄った。

ここには先日商店街の屋台で取った二匹の金魚の入った瓶が置いてある。真咲はこれらを眺めるのが好きだった。小さくても一生懸

命生きている彼らを見ると、自分も頑張ろうと思わされる。
ところが――

「こんぶ、うめぼし」

様子がおかしいと思ったら、二匹はぽっこりと膨らんだお腹を上にして水面に浮かんでいた。

瓶を叩いても揺すっても動かない。……既に息絶えているのだ。

なんてことだ、と目の前が真っ暗になる。小さい瓶の中では可哀想だろうと、終業式が終わったらすぐお年玉を持ってペットショップに行こうと思っていた、その矢先だ。

真咲はしばらく呆然と佇むと、居ても立っても居られず部屋を飛び出した。

最後の夏休み (2)

部屋のチャイムを2回連打されたあと、扉を強く打ち付ける音がして目が覚めた。

「誰だようっせえ……」

昨晚からネットサーフィンをしていたらいつの間にか寝ていた。クーラーを掛けっぱなしにしていたせいか喉が痛い。また、テーブルの前で変な姿勢で寝ていたためか、少し動くと体中の関節が悲鳴を上げた。

外に居るのは新聞か宗教の勧誘か何かだろうか。どうせ自分が中に居るのを知っている訳では無かろう。無視を決めこんで布団に潜り直したとき、ガラッと部屋のガラス戸が開いて、何者かが駆け込んできた。

「ユキナリ！」

名前を呼ばれて慌てて飛び起きる。

「うわっ、なんだ？」

一瞬強盗でも押し入ってきたのかと肝を冷やしたが、そうではなかった。目の前では瞳を真っ赤に充血させた真咲が息を切らしている。

勝手に上がり込んできた非礼を責めるのは後にして、「どうした、何かあったんだ」と尋ねる。きつと、何か大変なことがあったのだろう。そうでなければ、こんなことをするわけがない。

真咲は行成の横にぺたんと座ると、切羽詰まった悲痛な面持ちで

はき出した。

「あのね、この前とってもらった金魚」

「うん」

「今日家に帰ったら、死んじゃってた」

震える声でそう告げた真咲の肩を、行成は軽く撫でるように叩いた。

「そっか……。残念だったな」

なんだ、そんなことと無碍にはできない。自分にも、同じ経験があるからだ。

命のあるものいつか必ず息絶える。特に動物は人間よりも長く生きられないから、そばに置いていれば、早かれ遅かれ別れの時は訪れるのだ。

だけどそれが解っているからといって、ショックが減るわけじゃない。よくあることだ、と言っても何の慰めにもならない。今悲しんでいる人間にとって必要なのは、それを悼み、気が済むまで待っていてやることなのだから。

ちょっと待ってろ、と言いつつ残して台所へ向かう。流しの水で適当に顔を洗ってから、グラスに氷を入れ、冷えた麦茶をそれに注いだ。麦茶を持って部屋に戻る。グラスを差し出すと、真咲は頬に滴る汗か涙か分からないものを拭い、麦茶を半分飲み干した。

喉を潤すと真咲は少し落ち着いたようで、「いきなり迷惑かけてすみません」と行成に向かって頭を下げた。

全く、この年頃の子供というのは解らない。案外しっかりしているかと思いきや感情が脆く、幼さを見せたと思ったら急に大人びた

表情をする。そういえば、自分にもこんな頃があったのかな、と懐かしく思い出した。

グラスに残ったもう半分の麦茶をすべて飲みきってしまうと、真咲は立て膝から正座へと急に姿勢を変え、畳に手を付いて行成の顔を真正面から見据えた。

「ユキナリ、お願いがあるんだ」

なんだろう、と胸がざわつく。赤の他人の自分に出来ることなどあまりないと思うが……。

真咲は机の上を指さして言った。

「これって死んでるやつでもできるんだよね」

ああ、と答える。真咲の指先には以前披露した透明骨格標本の入ったガラス瓶が置いてあった。

そこで行成にも、真咲がわざわざ家を訪れた理由に気づくことができた。

「こんぶとうめぼしで、これ作りたい」

真咲の切れ長の瞳が、自分を射抜くように見つめている。

「結構めんどくさいけど、本当にやるの？」

「大丈夫、絶対やりきれる」

「夏休みつぶれちゃうけど、いい？」

「いいよ。ユキナリさえよければ。だから、お願いします！」

強い意志を持った視線に押され、「ダメ」と断ることはできなかった。

次の日の午後、終業式を終えた真咲が、さっそく金魚の亡骸を持ってアパートに現れた。

台所に二人並ぶと、流しの下から奥の方にしまっていたホルマリンの瓶を取り出す。以前標本を作った際に化学系の大学の友達より分けてもらったものだが、また使うことになるとは思っていなかった。

「それじゃ、やるか」

真咲がゆっくりと頷く。換気のため窓を開け放しているせいか、外の音がよく聞こえる。

「ちょっと辛いかもしれないけど……いいな」

まずは見本を見せるため、黒い方の金魚の腹にカッターを宛てて腹を開いた。

真咲は一瞬「うつ」と顔をしかめたが、すぐに真剣な目に戻り行成の手元を注視した。

行成からカッターを受け取ると、真咲は赤い金魚の体に切れ込みを入れた。

それからおおざっぱに内臓を掻き出す。そんなもんでいいよ、と言うと真咲は持ってきたデジタルカメラに金魚の姿を収めた。

なんでこんなもんを撮ってるのだろうかと思っただけで真咲の横顔を見つめていると、真咲は真面目な顔で答えた。

「せっかくだから、夏休みの自由研究にしようと思って」

なるほど、と思わず感心してしまった。この手の実験要素のあるモノづくりは、自由研究の課題にぴったりだろう。転んでもただでは起きない芯の強さを、小さな子供の中に感じた。

行成は手順書をぺらぺらとめくりながら真咲に言った。

「それで、次は固定。ホルマリンは危ないから、必ず手袋すんだぞ」

真咲は透明なビニール製の手袋を手にはめると、金魚の体をホルマリンの入ったタッパーへと沈めた。

すぐに蓋をする。あとは、このまましばらく放置である。

真咲が尋ねる。

「どれくらいかかるの？」

「大きさにもよるけどこれぐらいなら固定に3日4日……、一応毎日チェックしたほうがいいかもな。それで、全部完成するまで1ヶ月ぐらい」

「じゃあ、また明日きてもいい？」

特に断る理由もないので「いいよ」と答える。真咲は利発な子だから、こちらが構ってやれないときは空気を読んでくれるだろう。

こうして、真咲の小学校最後の、そして行成の学生生活最後の夏休みが始まった。

途切れた放物線 (1)

じりじりと焼け付くような日々が続く。真咲は毎日の様に行成の部屋にやってきた。標本作りに使う試薬は劇物が多く、小学生に保管させるのは危険だと判断し、実験はすべて自分の家でやらせることにしたからだ。

金魚の様子をみてすぐに帰る日もあれば、本を読んだりテレビを見たり簡単なものを作って食べたり。真咲が「ルールを知ってる」と言うので、二人で将棋を指したりすることもあった。

我が儘を言わずあまりひねくれたところのない性格の真咲は、行成の生活にずっと馴染んできた。

(――まるで、全然吠えない犬でも飼ってるみたいだな)

こちらが何かを言え好奇心に目を輝かせて話を聞いてくれる、従順で素直なペットのよう。物覚えもいいから、暇つぶしに話す相手としては丁度いい。

それに、「お世話になってるから」と言って皿洗いや部屋掃除などを手伝ってくれる。お陰でここのところ不規則でだらしなかった日々が、そこそこまとまってきた。

だけど、気になることがある――

真咲はテーブルの向かいで彼の家にあった「ブラック・ジャック」の単行本を黙々と読んでいる。あどけないが涼しげで整った横顔。どんなに暑い日でもパーカーを着てくるのは何かのポリシーなのだろうか。

行成は真咲が一冊読み終えて次の巻に手を伸ばしたタイミングで、思い切って尋ねてみた。

「あのさあ、マサキ」

「なに？」

真咲が顔を上げた。

「お前、せっかくの休みなのに友達と出掛けたりしねーの？」

ほぼ連日のように家に現れる真咲。ちょこちょこと近況のようなものを話したりするが、「今日これから××君と会ってくる」などと言う話は一向に出てこない。

行成としては、家に来られることも別に迷惑ではないのだが……。こんな歳の離れた人間と一緒にいるより、同世代の子供達と遊んだ方がよっぽど楽しいのではないか。

行成の問いかけに、真咲の顔色が一気に曇る。

「……友達、いないんだ」

意外な回答に、行成は「えっ」と言葉を詰まらせた。

真咲は一般的にいじめられるような人間のように鈍くさくもないし、むしろ頭がよくて冷静な、小学生であればクラスのまとめ役になるタイプだと思っていた。

確かに真咲は美少年然としていてやんちゃだった自分の小さい頃とはまったく異なるが、それでも友達がゼロというのは考えにくい。

「なんで？」と少し無神経かもしれないが聞いてみた。おそらく何か、理由があるに違いない。

「この前転校してきたばっかで、なんか、みんな話しかけづらくて……」

言い訳をするように、小さな声で真咲が続ける。そう言えば、前

にちらつと「4月にこっちに来た」と聞いた気がする。

「じゃあ、学校のあとみんなであって遊んだり……」

「しない。みんな、塾とか習い事で忙しいみたい。こっちに来る前は、結構遊んだりしてたんだけど……」

行成は軽くため息をついた。

「そっか、なんだか勿体ねーなあ」

「……何が？」

「俺なんか、お前ぐらいの時、毎日学校行くのが楽しくてしょーがなかったけどな」

思い起こしてみれば、あの頃が自分にとって一番幸せな時期だったかもしれない。仲のいい友達とふざけ合って、怒られて、大笑いして……。何の悩みも不安もなくて、毎日がただひたすら輝いていた。

親の都合とはいえ、そのような時代を奪われてしまったというのはいくらなんでも可哀想だ。……かと言って、自分に出来ることは何もないのだけれど。

「小学生だったら、昼休みに『一緒に遊ぼーぜ!』って言えばたいていどうにかなるんじゃないかねえの?」

余計なお世話かと思いつつそう忠言する。

真咲は「そうだね」と呟くと、「今日はお母さんが早く帰ってくるから」と言って行成の部屋を後にした。

途切れた放物線 (2)

その次の日、ふと思いついたことにより行成は夏期休暇中の大学へと赴いた。

ついでに就職活動で何か動きはないかと学生課を訪れる。が、特に手応えはなし。これは、と思うような外資系の大企業の会社説明会の案内もあったが、既にそれは自分より一年卒業が遅い者にむけて発せられているものだった。

周回遅れになっているのでは、と気づかされた。しかし、最近では焦ってもしようがないと妙に開き直ってきた。どのみち、このような大手では自分のような者は採っていないだろう。

中庭が見える木陰のベンチに座り、ぼんやりと景色を眺める。芝生の広がる中庭では、まだ1、2年と思しき運動部の生徒たちが、ジャージ姿でストレッチなどをして体をほぐしている。

肘を付いてなんとなくその様子を見てみると、ポン、と肩を叩かれた。

「矢野っち」

振り向くと、入学以来の友人である遊座が佇んでいた。

行成と遊座は同じ法学部だった。彼はもう卒業しているため、会うのは実に久々になる。

学部時代はイケメンで慣らした遊座であるが、今の姿は髪は伸びっぱなしで頬は痩けてやけにやつれて見えた。服もいつも最先端すぎないおしゃれで洗練されたものを身につけていたのに、今日はよれよれのカッターシャツにスラックス、それに足下はゴム草履という適当な格好である。

「おう、久しぶり」

引きつりながらそう言うと、遊座は力なく笑った。

「意外に元気そうだね」

それには自分でも驚いている。ついこの前まで廃人のような生活をしていて、傍から見ると今の遊座と同じような雰囲気だったと思う。遊座には内定取り消しのこともメールで伝えたから、そんなに堪えていない様子の行成が意外だったのだろう。

（――あいつのお陰かな）

毎日のように現れる小学生の姿を思い描いた。本来であれば彼女の一人でも作って連れて歩きたいところだけど、同性の・しかも年下の子供であれど、他人と会って話す機会を持つというのはかなりいい刺激になっているようだ。

ここじゃなんだから、と誘って連れ立った。学校の近くの安いファミレスに入り、リゾットを頼んで窓際の席へ座った。

ふうふうと冷ましながら口へ運ぶ。遊座は昼間だというのにワインを飲んでいた。

遊座がワイングラスの細い柄を持ってゆっくりと回した。その薬指に細く光る装飾品があるのを見て、ふと思い出した。

「そーいやお前の彼女ってスクールカウンセラーだったよな。今のガキってどんなもん？」

なんでそんなこと聞くの？ と尋ねられたので「兄貴の子供が今

度小学生」と適当に嘘をついた。

遊座の彼女は以前会ったことがある。小柄で細身の可愛い外見だが、頑固で我が儘の多い性格で、その子の進路を聞いたとき「こんな娘がカウンセラーになっていいもんだろうか」と思ったものだ。

「やっぱね、上の学年に行くほど難しくなってくるみたいだよ」

上の学年——たしかあいつは六年生だ。遊座の話が本当なら、最も大変な時期だろう。

「今は悩みを抱える子多いからね。いじめとか、家庭の問題とか」「へー。それって、頭のいい子でもなるの？」

「そういう出来はあんまり関係ないかな。いい子はいいい子なりに、悪い子は悪い子の問題があるし。中には、プレッシャーで押しつぶされちゃって引きこもりになったりする子もいるって言うよ」

それ以上は本題から逸れすぎかと思い、聞くことができなかった。遠くを見つめる遊座の視線は、どこを彷徨っているのか分からない。覇気のない態度に、何故か軽く胸騒ぎがした。

「そういえば、何で学校きてんの？」

「……俺、やっぱ大学院に行こうと思って。成績表取りに来た」

「えっ……、じゃあ、会社は」

「……もう、辞めてきた」

せっかく就職したばかりじゃないか、と口を突いて出そうになった。

遊座は行成と違って、優秀な生徒だった。鶏口となれど牛後となるなかれの言葉通り、同じ大学に通っているが「なんでお前うちに

いるの？ もっと上の学校行けたんじゃない？」と聞きたくなるほどであった。

教授の覚えもめでたく、たしか推薦で大手の商社に内定をもらったはずだ。

自分にとってはなんとも羨ましい環境だが、彼にとってはそうでもないらしい。

「俺たちが見てるところって、世界の一部でしかないんだよな」

当たり前だけどさ、と彼は細面の顔を歪めてはにかんだ。

「常識だと思ってたことが世間に出るとそうじゃなかったり、憧れてたはずのことが、近くで見ると案外大したことないと知ったり……。まだ俺若いのに、このままの中で腐ってっちゃっていいのかな、って。だから、俺はもっと色んなことが知りたいと思ったんだ」

遊座の言葉は漠然としていたけれど、なんとなく言いたいことはわかった。

きつと、彼も相当悩んでこの答えを出したに違いない。憔悴しきった表情が、その証だ。

おそらく他にも理由は数え切れないほどあるのだろう。だけれども、今彼がそれを口にしたくないのであれば、敢えて問いただす必要もない。

「お前、意外に思い切ったことするよなあ」

「まあね。でも人生に正解ってないと思うんだ。自分が自分で選んだ道なら、何があっても受け容れようと思って」

後悔しない？ と尋ねると、実はもうちょっと後悔してると、情けなく笑った。

次の日現れた真咲は、いつもより少し元気がないように見えた。

真咲は部屋に来るなり金魚の入ったタッパーに向かい、デジカメを取り出した。今は水酸化カリウムで透明化をしているところだからなかなか変化が起こらないが、一応日毎の変化を記録して発表に使うつもりようだ。この課程が一番時間のかかるところで、大きい被検体でやると数ヶ月かかることもあるらしい。

金魚の様子を写真に収めると、行成は真咲に後ろから近づいた。

「なあ、これから何か用事ある？」

「特に、ない……けど」

真咲が口ごもるように答えた。

別に相変わらずヒマなことを責めようとしているわけではないのだが。

行成は真咲の緊張をほぐすように、ニカッと笑った。

「たまには外、出てみない？」

真咲が「えっ？」と口を開けて行成の顔を見上げる。

「これ、借りてきたんだ」

足下に置いてあった紙袋に手を伸ばすと、中から少し年季の入っ

たグローブとボールを取り出した。

グローブをはめて拳を叩きつける。

「天気もいいし、キャッチボールでもしに行こうよ」

真咲が少し戸惑いながらも「うん!」と元気よく返事をしたので、行成は靴箱から運動靴を取り出して、真咲と一緒に外へ出た。

途切れた放物線 (3)

高速道路の高架下、金網を張り巡らされた通称「鳥かご」の中に入る。

夏休み中だが日中のせいか他に人もいない。これも少子化の影響なのだろうか。

「まずは何にも考えずに投げてみようぜ」

ぎこちなくグローブをはめた真咲が、行成に向かって腕をしならせた。

「あー、そうそう。結構上手い」

パシッと小気味よい音を立てて捕球すると、軽い力で真咲にボールを投げ返した。

正面じゃなくて、横向きながら投げてみる、とアドバイスする。すると、力の入れ方が分からなくなったのか、真咲の指から離れたボールは行成の頭上を超えて遠くへと抜けてしまった。

駆け足でボールを追いかける。金網にバウンドしたところを捕まえて、元いた場所に走って戻った。

「結構やるじゃん」

そう褒めると、真咲は曖昧に笑った。まだ小学生なのに随分と大人びた顔をするのだな、と感じた。

真咲はなかなか筋がいい。コントロールはいまいちだが、フォームはきれいだし、捕球をした際にボールに力がある。

野球やったことある？ ううん。ルールもほとんどわかんない。

じゃあプロの試合とか見に行ったことない？ ない。テレビでも見たことない？ ……田舎でチャンネルが少なかったから。

そんなやりとりをしつつ、「今の子は娯楽が分散してるからそんなもんなかな」と妙に寂しく思った。

時折頭上を重機がゴーツと唸りながら駆け抜ける。その合間には、皮と軟球の立てる軽い音だけが数秒おきに響いていた。

「ユキナリは、ずっと野球やってたの？」

「ああ。高校までは朝も夜も野球。毎日毎日、そのことしか考えられなかったよ」

軽くステップを踏みながら、少し高めにボールを放る。

捕れないかな、と思ったが真咲は体の前できちんと捕球した。

「俺さあ、左利きでしょ。左投げのピッチャーってあんまりいないから小さい頃は重宝されんのね」

過去を振り返りながら語り出す。こんな話、友人はおろか付き合った女の子にすら言わなかった。

「でも中学の頃はあんまり学校が強くなって……。どこの高校からも推薦はもらえなくて、結局地元の公立高校だったのね」

自分の出身の県は、プロチームの本拠地が在籍することもあるって、近隣の県より野球が盛んな土地柄だった。

きつと真咲には言っても理解できないだろう。だけどそんな考え

とは裏腹に、言葉は次々に溢れてくる。

「甲子園出ようと思って、そんでもって行く行くはプロになりたいくて死ぬほど練習したよ。県大会の、結構いいところまで行っただぜ」

そこまで言うのと、行成は急に声のトーンを落とした。

「だけど結局、私立の奴らには勝てなかった。あいつら、設備も選手層も段違いだもん」

県大会の準々決勝。1点リード迎えた最終回、ノーアウト1・3塁。替えのピッチャーはいない。迎えたバッターはプロのスカウトにも目を付けられている四番の強打者で、今日はここまでなんとか抑えていた。

ここを切り抜ければ、準決勝行きの切符を手に入れたも同然だ。頑張れ、いける。どくどくと沸き立つ体中の血を感じながら、そう自分を鼓舞した。

キャッチャーのサインを確認する。外に一球外したから、次は内角低め。

（あっ！）

手元が狂ってすっぱ抜けてしまった。高めに浮いたボールはど真ん中の絶好球。

鮮烈な残像と共に、金属音が鳴り響いた。白いボールは雲一つない空に吸い込まれるように舞い上がっていく。

ボールは場外へと消えて目で追うのは不可能になった。特大ホームランだ。

——今思えば、あの時、あの瞬間の直前が自分のピークだった。甲子園という夢の舞台が一番近づいていて、そして放物線と共にあっけなく途切れた。

悔しくて悔しくて、野球はやめてしまった。試合も見なくなったし、なるべく野球から距離を置いて過ごすようになった。

「大学では、何やってたの？」

「何って、専攻のこと？ 法律だよ」

「じゃあ、弁護士さんとかになるつもりだったの？」

「うーん……、それもまあ、考えたけど」

「うん」

「やっぱああいうのになれる奴って特別だよ。俺みたいな中途半端なのじゃ無理だ」

今まで練習に打ち込んでいた時間を受験勉強に替えたなら、引退から1年半かかってまああの大学に受かることができた。もしかして野球に費やしていた時間は無駄だったんじゃないかとすら思った。大学に入った当初は、それなりに勉強も真面目にしていた。けど記憶力も議論の組み立ても、優秀な学生には到底及ばない。気が付くと、あれだけ頑張って入ったはずの学校なのに、サボりがちになっていた。

勉強にしろ恋愛にしろ、本当に夢中になれることなんて、何一つ見つからなかった。

それなのに、体は何年経っても覚えている。グローブに白球が吸い込まれる音の心地よさや、ボールをリリースするときの全身の神経が指先に集まる感じ。

（こだわってたのは、俺のほうかもしれないな）

手の中のボールに目を落とす。硬球よりも大きくて軟らかいが、きつとバットで思いつき振り抜いたら、笑っちゃうぐらい気持ちよく飛んでいくだろう。

「ユキナリ、こっち！」

あの日、見えなくなった白いボールは、いまどの辺を転がっているのだろうか。泥にまみれて、ボロボロになって、誰にも見向かれず朽ち果てているだろうか。それとも、案外どこかの男の子に拾われて、大切な遊び道具として使われているのかもしれない。

行成は金網ギリギリいっぱいまで後ろにダッシュすると、持てる限りの力でボールを高く放った。

キャッチボールを初めて1時間ほど経ったところで、行成は水分を補給するがてらに真咲へ呟いた。

「疲れたな」

「こんなんでもバテるなんて、おじさんだねー」

ニヤニヤしながらそう言う真咲に、行成は大人げなくムツとした。

「お前がノーコンだからだよ」

昔から、筋力や敏捷性はあるものの、暑さには弱かった。そ

れにここ5年ほどまともに体を動かさず不摂生ばかりしていたのだから、へばってしまったのも無理はない。

せっかく外に出たのだから、と帰り際に商店街へ立ち寄った。本屋で予約していた雑誌を受け取り店内を探すと、真咲は読んでいた本を慌てて本棚へ戻した。

「何読んでたんだ？」

「う、うん。何でもない」

真咲が立っていたのは、中学受験用の参考書のコーナーだった。

（ふーん……、そうね……）

アパートに戻る頃には日が西に傾いていて、糸が切れてしまったのか、真咲は本を読んでる途中で部屋の隅で眠りこんでしまった。

「お前、そんなところで寝てると風邪引くぞ」

「うーん……」

返事はするものの、動く気配はない。仕方なく行成は、真咲の体に薄手の毛布を掛けてやった。

しかし変な一日だった。真咲の気分転換のため外へ連れ出したけれど、結局楽しんでいたのは自分の方だったかもしれない。（キャッチボールを選んだのは、他に遊びを知らないからだ）

真咲にも随分懐かれたものだと思う。生意気な口を利くようにも

なったし。犬を捕まえて送ったときは、もう二度と会わないものだ
と思っていたが。

細い首、流れる糸のような髪、すべすべの肌、長い睫毛。今は中
性的でどちらかというと「かわいい」顔ではあるが、ここから甘い
雰囲気を抜いたらどんな男になるのだろう。おそらく、人の噂に上
るような色男になっていることだろう。

この子は、今は友達がいなかったからこうやって自分のところに来て
いるが、そのうちきつと自分に見合った相手を見つける時が来るは
ずだ。

自分は、獣医にも、野球選手にも、弁護士にもなれなかった。だ
けけれども、こいつは違う。将来がいくらでも待っているし、今から
エリートコースに乗って、このまま成長したらどんな大物になって
いるか分からない。10年後もこうして歳の離れた友達として、自
分を慕っていてくれるだろうか。

その答えは、時間を待たずとも既に出ている気がした。

自覚

「それじゃ、いよいよ最後の置換だな」

手順書と金魚の入ったタッパーを見比べながら、真咲の隣に立った行成が言い放った。

透明骨格標本作りも終盤に入り、今日は水酸化ナトリウム溶液からグリセリンへの置換にとりかかる。

赤と黒だった金魚もいまではすっかり色が抜け落ちて、どちらも体が紫色に透き通っていた。

料理用の電子スケールにビーカーを乗せ、正確に計量してからタッパーの中へと入れる。

ここから、2〜3時間置きにだんだんとグリセリンの濃度を高くしていく。水酸化ナトリウムが肌に付かないよう、慎重に作業した。

「よし、これで一旦休憩だな」

ここまで来るのに意外に時間がかかった。当初できあがるまで1ヶ月ほど、と行成は言っていたが、終業式の日から初めて、すでに今は長い夏休みの最終週である。

外では相変わらず蝉がやかましく鳴いている。けれどふと空を見上げれば、最近日の暮れるのが妙に早くなったな、と気が付く。

次の置換まで約2時間。外に出る時間もない。行成がテーブルの前に腰を下ろしてノートパソコンを開くと、真咲もその斜め向かいに座り、これまで撮った標本の写真をペラペラとめくった。どうやら今日は待っている間、レポート作りをするらしい。

手順書を参考にしながら大人しく作業をしていた真咲だが、「脱色4日目」と書いたところで、あーあ、と大きくため息をついてテーブル上に突っ伏した。

「あー、もうすぐ二学期かあ」

「どうした、すげえ嫌そうじゃん」

うーん、と真咲は首を捻る。

「なんか、また学校始まると思うと、気が重くって」

「やっぱお前、友達少ないこと気にしてんの？」

そう言うのと、真咲は俯いて黙ってしまった。凶星だったらしい。

行成はくつと目を細めると、パソコンの画面から視線を外して真咲に向き直った。

「この前言ったことさあ」

真咲が顔を上げて「どれ？」と聞き返すと、「昼休みに声かければ友達なんてどうにかなるとかそんなの」と答えた。

「あれ、やっぱ俺がまちがってたかも」

えっ……、と真咲が固まる。解ってもらえて嬉しいような、気を遣われて戸惑っているような、そんな複雑な顔だ。

「俺の頃はそうだったけど、今の子はいろいろあるから、そう簡単に行かないかもしれないな」

行成は先日遊座が語っていたことを思い出した。「上の学年にな

るほど難しい」と。「自分たちが見てたのは世界の一部だ」と。
だから真咲がうまく周りに馴染めなかったとしても、本人が悪い訳じゃないのだ。自分の小さい頃は、偶然意地悪な人間がいなかっただけかもしれないのだから。

行成の言葉に、真咲は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「でも……、頑張ってみるよ」

そう意気込んだ真咲の生真面目さが可笑しくて、行成は思わず吹き出してしまった。

「ははっ」

何を笑われているのか分からなくて、真咲は慚然として首を傾げた。

「何でわらうの」

「……お前、ホントにいいヤツだよな」

苦手なことなら敢えて立ち向かわずに逃げてもいいのに、期待に応えようと努力をする。

そんな自分にはない「純粋さ」を幼いと思う半面、いつまでも持っていてほしいと願ってしまう。

「少なくとも俺はお前のこと友達だと思ってるし、俺は好きだよ、お前のこと」

多少クサイ台詞だとは承知していたが、しょげている子供を立ち直らせるにはこれぐらい言ってもいいはずだ。

言われた真咲はというと、案の定耳まで真っ赤になってしまった。

「友達なのに好きって変なの」

素直に「ありがとう」と言えないのも若さ故か。そう思えば腹も立たない。

行成は真咲の方へ手をのばすと、その細い背中をポンポンと二度叩いた。

「変かな。でもまあ、自信持てて」

細い顎に高すぎない鼻。照れている横顔も可愛らしい。きっとこいつは、思っていたよりも母性本能をくすぐるタイプじゃないだろうか。

もし自分がこの年でこのルックスだったら、周りの女の子に片っ端から声掛けるのにな、と変なことを想像した。

その後の真咲は、ふわふわと覚束ない心と必死に戦いながらも、レポート作りに専念した。

3回目の置換をしているところで、台所の外からチャイムの音が聞こえた。午後6時だ。今日は母親が普通番の日だから、もうそろそろ帰らなくてはいけない。

「あとは明日になったら防腐剤入れて終わりだな」

感慨深げに行成がため息をついた。「明日ビンを必ず持ってこいよ」と付け加えたので、真咲は手の平に「びん」とマジックで大き

く書いた。

真咲は後かたづけをしながら、はるか頭上にある行成の顔を見上げた。

「ユキナリ、標本作りはもう終わりそうだけどさ」

きっと、明日になってしまっただけじゃない。だから、今のうち告げておきたい。

「これから、遊びにきていい？」

ドキドキと胸が高鳴る。行成が次の言葉を口にするまでの時間が、とても長く長いもののように感じられた。

すると行成は、きょとんとした顔で真咲を見つめ返した。

「なんで？」

「なんでって……」

そう聞かれてもうまく言葉が出てこない。

やはり迷惑だったんだろうか。がっくりと肩を落としそうになったその時、行成は凝った肩をほぐすように回しながら子供のよう破顔した。

「いいに決まってるんだろ」

絶望の淵に立たされていたのが、急に引き戻されるように心が舞い上がっていく。

「なんで」の後に続くのは「わざわざそんなこと聞くの」という言葉だったらしい。

何故だか急に行成の顔を見るのが恥ずかしくなる。俯きながら真

咲は「そ、そっか」とだけ小声で言った。

それから真咲は何かに追い立てられるようにして、早足で行成のアパートを後にした。

家までの道のりを急ぐ。吹く風は涼しくなってきたのに、顔の赤みがなかなか取れない。

『俺は好きだよ、お前のこと』

半ば駆けるように歩きながら、彼の言葉を反芻する。思わず憎まれ口で応じてしまったが、本当はものすごく嬉しかった。

(好き、だって)

たった2文字の言葉の響きだけで、初めて彼と出会った時からくすぶっていた感情がなんなのか、説明がついてしまう気がした。

彼が笑うとうれしい、近くに寄られるときどきする、泣いていると思ったときは代わってあげたいと願った……、ずっと見て見ないふりをしてきたけれど、彼と一緒にいるときはいつもこんな事を考えていた。

(好き)

心の中で呟いてみる。すると、今まで抑えつけられていた気持ちが、押し寄せる波のように溢れ出した。

(自分も、ユキナリのことが好きだ)

しかし真咲は、彼の「好き」と自分の「好き」は全く違う種類の

ものであることも、はっきりと感じ取っていた。

クラスメイト (1)

何をやっても落ち着くことのできない日々が続き、夏休みの最終盤は駆け足で過ぎていった。

「明日から学校なんだから、今日は早く寝なさい」

一階のリビングルームでニュースなどをなんとなく見ていた真咲に、母親が気怠そうに忠告した。

階段を登って二階の自室のドアを開ける。

机の上には、この夏休みをかけて完成させた金魚の標本が鎮座していた。

ガラス瓶の中にぽっかりと浮かんだ透明の魚。見る角度を変えようと、濃く染まっている部分とそうでない部分が折り重なって微妙に色合いが変わる。眺めているだけで不思議な気分に関われるのは、色合いが美しいからだけじゃない。

真咲の脳裏に、一つ一つの行程がよぎる。そしてその度に、すぐ横にいてアドバイスをくれたあの人の声も笑顔も。

『自信持ってって』

明日からまた学校が始まるのは不安だ。でも自分は、きっと何があっても頑張れる。そんな気がした。

日が変わって、朝が訪れた。カレンダー上では既に秋と言っているのに、青く晴れた空には相変わらず元気な太陽がきらきらと輝いていた。

二学期のはじまりだ。それまでより少しだけ軽い足取りで学校へ向かうと、昇降口のところで同じクラスの女子と一緒にになった。

「おはよ」

「お、おはよう」

ぎこちなく挨拶を返す。この女子は誰にでも分け隔てなく接し、話題も豊富な子で、真咲としてももうちょっと仲良くなってみたいと思っていた。

けれど、教室ではリーダー格の女子が非常に彼女を気に入っており、「側近」として常に彼女を離さないため、話しかけられるのはどうしてもためらわれた。

宿題全部終わった？ と聞かれたので、一応。と答える。

えらいねえ、私なんかずっと海外に旅行に行ってたからできなかったよ、とその女子は言った。真咲ちゃんはどこか行った？ と続けられたが、夏休み中は叔父さんと山に行ってロープウェイに乗った以外はほとんど遠出もできなかった。

ううん、と首を振る。自分の経験の少なさが、身にしみて情けなかった。

教室に着くと、皆の日焼けした顔が、少し大人びたようにも見えた。それぞれ土産物を交換したり、夏休み中にあった出来事を語り合ったりではしゃいでいたが、その輪の中にも加われず、真咲はぼんやりと窓の外を眺めていた。

その日は始業式のあと、教室にもどって夏休みの宿題の提出が行われた。

教科ごとの問題集、読書感想文、日記などは教室の前に置かれた教卓に、自由研究は教室の後ろ・ランドセル入れの上に並べるよう指示をされた。

自由研究は建前上「何を作ってもいい」ということになっているので、工作キットでつくったと思われるラジコンロボから、明らかにやつつけで済ませたような粘土細工、細かい作業が得意な女子などは1メートル四方にも及ぶ大作のパッチワークを持ってきていた。真咲は自作の骨格標本とレポートを、わざと隅っこに置いた。目立ちたくないという理由もあったが、それよりもへたに触られて壊されたくないという気持ちがあったからだ。

帰りの会が終わり、さあ帰ろうとランドセルを肩に掛けたとき、真咲はちよいちよい、と担任の教師に手招きをされた。

何事かと思い教師について行く。教師は一旦廊下に真咲を連れ出すと、しばらくそこで待っているように言われた。

数分後担任が学年主任の中年教師を伴って戻ってきた。そしてほとんどの児童が帰ってしまった教室に再び入ると、後方に並べられた自由研究の中から、担任は真咲の作った標本を指し示して学年主任へと見せた。

「これがさっき先生が言ってたやつですか。いやはや本当にすごい出来だ」

学年主任が感心しきりと言った感じでため息をついた。でしように、と担任が何故か誇らしげに答える。

一方の真咲は、いきなりの賞賛に事態が飲み込めずにいた。なぜ学年主任まで来るんだろう？ その事ばかりが気になった。

「今回ののはこれで行きましょう」
「文句なしで決まりですね」

そんな言葉を交わしているが、何のことやら。
戸惑うしかできない真咲に、担任が穏やかな声で告げた。

「今度この地区の科学展がやるんだけど、うちの学校にも参加の
お願いが来てるのね。それで、学校代表として、真咲ちゃんの研究
を出品してもいいかしら」

「えっ……」

まさかそんな大それた話になっているとは予想だにしておらず、
急に心拍数が上がる。

どうしよう、と一瞬逡巡した。できればあまり目立つようなこと
は避けたかった。

だけどこのことを一緒に作った彼に伝えたら、きっと喜んでくれ
るに違いない。やったじゃん、そう言って笑う顔までが想像できた。
気が付くと真咲は「はい」と担任に向かって返事をしていた。

次の日――

朝から雨が降っていた。昼休みは外で遊べず鬱屈が貯まっている
のか、教室の後ろで男子達がぎゃあぎゃあと騒ぎ始めた。

日直の真咲は黒板を消していた。騒々しいと思ったが、注意する
ほど仲良くもない。

そのうちプロレスごっこにも飽きた男子児童たちは、教室の後ろ
に並べられた自由研究を弄りだした。

お前のは手抜きだ、そっちこそ父親に手伝ってもらったんだろう、
そんな会話が聞こえてくる。

「なんだこれ、気持ち悪い」

そう言ったのは久慈昂という男子だった。

久慈は体は小柄だったがその分気が強くて手が早く、やれ女子を泣かせただの、学校の規則を破って危険な場所で遊んでいたあの、たびたびめ事を起こすので先生達も頭を悩ませているようだった。真咲としても久慈は授業妨害をするので苦手だった。ただ、教室の隅にいる真咲と、良くも悪くもクラスを中心となっている久慈では、ほとんど関わることもない。なるべく距離を置いていけば、それほど迷惑もかからなかった。

「オバケだ、オバケ。魚のオバケだよ」

気になる言葉が聞こえて、耳がぴくりと動いた。慌てて振り返る。すると久慈とその取り巻き2、3人が、真咲の標本を手にとって、気味悪そうに眺めていた。

「うげえ、チョーグロい」

「さわんな、さわんな。呪われるぞ」

止めろ、乱暴に扱うな、そう叫びたくなった。

けれど、そんな風に食って掛かったらやつらがますます調子に乗るか、ドン引きされていっそう孤立してしまうかどっちかだ。

煮えくりかえる心をなんとか宥めつつ、真咲は再び黒板に向き直った。

と、その時だ。

（がしゃん！）

何かが割れる音と共に、教室が静まりかえった。

嫌な予感がする。恐る恐る振り返ると、教室の床にどろりとした液体が教室に溜まりを作っていた。

ふらふらとした足取りで、教室の後ろに吸い寄せられるように移動する。水たまりに近づいてみると、浮いているのは……かつてこんぶとうめぼしと名付けていた金魚の標本だ。床に落とした衝撃か、骨がところどころひしゃげてしまっていた。

ぷつん、と何かがキレた音がした。

「これやったの……」

真咲のただならぬ剣幕に、遠巻きに見ていた男子があいつ、と久慈を指さした。

真咲は久慈に近づくと、低い声で言った。

「ちょっとあんた、何やってんだよ……!」

クラスメイト (2)

(ユキナリが……、せっかくいっしょうけんめい教えてくれたのに
!!)

この標本は、一人で作ったものじゃない。

行成が、夏休みの間ずっと標本作りを手伝ってくれた。「ヒマだから構わない」などと言っていたけれど、赤の他人の子供の相手を毎日するのは面倒くさいときもあっただろう。それなのに、そんな顔は一度たりとも見せなかった。

だから自分も、その気持ちに応えようと頑張った。そうして完成した標本は、二人で協力して作った日々の、いわば絆の証みたいなものだった。

それが、全く関係のない人間によりぐちゃぐちゃにされてしまった。行成の気持ちまで踏みこじってしまった気分だ。

「謝れよ!」

怒りに顔を紅潮させながら、悲痛な想いで叫ぶ。

久慈は一瞬怯んだように顔をしかめたが、すぐに口の端をつり上げて、人を小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「あやまってどうにかなんのかよ。はいはい、すみませんでした」

カッと顔が熱くなる。

「ふざけんな!」

悔しくて悔しくて、手に持っていた黒板消しを投げつけた。

避けきれなかった久慈が粉まみれになる。「ぶはっ」と大きく咳き込むと、涙目になりながらも真咲に詰め寄ってきた。
屈辱に顔が歪んでいる。

「お前……、前から生意気なんだよ！」

「はぁ!？」

「田舎モンのくせに、スカしてんじゃねーよ！」

ドン、と体をはねつけられる。壁に当たり、真咲の体は大きく跳ねた。きゃあ! とクラスの女子の悲鳴が聞こえた。

が、そんなことで怖じ気づくほど真咲の怒りは小さいものではなかった。体勢を立て直すと、久慈に詰め寄り首根っこを引っつかんで締め上げた。

「謝れって言ってんだろーが!!」

6年2組の担任である女性教師は、そのとき職員室でお茶を飲みつつ休憩していた。

（あら、なにかしら？）

遠くから怒号のような響きが聞こえた気がした。しかし、今は昼休み中である。大方、どこかの児童がふざけて大声をだしたただけだろう。

あと3分、もう少しだけ休んでから次の授業の用意をしよう、と再び椅子に寄りかかったとき、ガラッと職員室のドアが開いて、担

任しているクラスの子供が血相を変えて駆け込んできた。

「先生、真咲ちゃんと久慈くんが……！」

なんなの、とその女子について急ぎ足で教室に戻る。
するとそこには、目を疑うような光景が広がっていた。

「死ねよバカ！ お前みてーなのは目障りなんだよ！」
「うっせーよチビ！」

転入生の嶋原真咲が、悪ガキの久慈昂と取っ組み合いのケンカをしている。周りは「そこだ、いけ！」などと囃し立てて、止める気配もない。

「こらっ！ やめなさい二人とも！」

一喝すると、それまで騒がしかった教室の中がシン……と静まりかえった。

真咲と久慈を無理矢理引きはがすと、「ちょっと二人とも、職員室に来なさい」と低い声で命令した。

「……とりあえず」

そう呟くと、担任教師は心底煩わしそうにため息をついた。
職員室の壁際に二人、久慈と並んで立たされている。お互いどんな表情をしているのか分からない。顔も見たくない。

「二人とも親御さんのところに連絡が行くかもしれないから、覚悟しておいてね」

担任としては脅し文句のつもりなのだろうが、今さらこのことを母親が知ったからといってどうなるのだろうか。自分はもともと母親にあまり好かれていない。現時点以上に自分の評価が下がることはない気がする。

口の中に鉄の味がする。もしかしたらさつきケンカをしたときにどこかを切ったのかもしれない。

担任は回転椅子に座ったままぐるりと久慈の方へ向いて、「教室の中で暴れるな」「ガラス瓶を投げるような危険なマネはするな」などと通り一遍の言葉で叱った。

午後の授業が始まってるからもう行け、と久慈を追い返す。久慈が職員室から出て行ったのを見計らってから、軽蔑と落胆を綯い交ぜにしたような目で真咲を見た。

「真咲ちゃん、あなた受験前だったのにこんなモメごと起こして……」

内申に響くかもしれないわよ、と担任が付け加える。が、別にそんなこと、今はどうだっていい。

何も言わずうつむく真咲に、担任は吐き捨てるように言い放った。

「あなた、もっと頭のいい子だと思ってたのに」

反射的にぎゅっと唇を噛みしめる。「もう行きなさい」と言われたので、真咲は下を向いたまま、担任に背を向けて職員室を後にした。

長い廊下をふらつきながら歩いて教室に戻る。今の時間は音楽室での授業をやっているためか、教室には誰もいなかった。

バラバラになった標本は、ビーカーの中の水に漬けられて、教室の後ろに置いてあった。

『あやまってどうにかなんのかよ』

『もっと頭のいい子だと思ってたのに』

心に大きく開いた穴から、悲しみが溢れだしてくる。

（ユキナリ、ごめん――）

背は高くせに、無邪気で子供っぽい彼の笑顔。自分のような者を、彼はあんなに可愛がってくれたのに、一歩外に出れば自分はそんな価値などこれっぽっちもない人間なんだと思い知らされる。

そんなにいけないことなのだろうか。大切な人と、時間をかけて作った世界で唯一のもの。それを壊されて怒る自分は、そんなに間違っているのだろうか。

みんな、居なくなってしまうばいのに。久慈くんも、先生も、自分を笑っていたクラスの人たちも、みんな――

ビーカーを見つめ続ける。そんなことしたってどうにかなるわけじゃないのに、足が張り付いたかのように動けなかった。

「……」

開け放した教室の扉のところで、誰かが息を呑んだ音がした。その人物は教室に入ってくると、すぐ近くまで来て立ち止まった。誰だろう、と振り返る。すると、そこに居たのは自分より先に職員室から出て行ったはずの久慈だった。

その浅黒い顔を見るだけで怒りが渦巻いてくる。立ち去ろうとしたとき、焦ったように呼び止められた。

「おい鳴原！」

無視しようとしたが肩を掴まれた。小柄な体に似合わず強い力で体の向きを変えられると、やけに神妙な口調で尋ねてきた。

「鳴原、それってそんなに大事なものだったのか」

真咲は答えない。何か一つでも言葉を発したら、心も体も、粉々に壊れてしまいそうだった。

放課後になると、雨はすっかり上がっていた。

グラウンドではどろどろになりながらサッカー部が練習している。真咲は彼らに気づかれないように、金魚の亡骸を校庭の隅に埋めた。

爪に入ってしまった土を流水でよく洗う。金魚は手厚く葬ってやったけど、だからといって気持ちに踏ん切りがつく訳でもなかった。これまでの真咲であれば、学校が終わった後は地区の図書館で勉

強をしたりもしていたのだけれど、今日はもう何もする気が起きない。早く帰りたい。

わざと裏道を選んで歩いていると、電柱の影に小さな女の子がうずくまっていることに気づいた。

（どうしたんだろう？）

赤いランドセルに掛けられた黄色いカバー。同じ小学校の一年生だろう。どこか体調が悪いのか、しゃがみこんだまま微動だにしない。

少しは気になったが、今日の真咲は疲れていた。気づかないふりをして電柱を通り過ぎたその時だった。

『お前、ホントにいいヤツだよな』

行成の言葉が頭の中に蘇る。ここでもし何もしなかったら、自分は行成の期待をまた裏切ってしまうことになる。

真咲はため息をつく、元来た道を引き返して、女の子に声を掛けた。

「どうしたの」

すると女の子は、ビクツと顔を上げて「あー……」と呻いた。

もじもじと足をすりあわせている。穿いていた灰色のズボンはどこどころ濡れて変色していて、お尻の下には小さい水たまりができていた。

（もらしちゃったのか……）

小学生では珍しいことだが、無くはない。ただこれくらいの歳になれば羞恥心も覚えはじめている頃だろうから、どちらかといえそっちの方が厄介だ。

真咲は怖がらせないように精一杯声を和らげて言った。

「大変だったね」

女の子の目が涙でいっぱいになった。もしかしたらずっと助けてくれる人を待っていたのかもしれない。

「お姉ちゃんが誰か来たら隠してあげるから、おうちに帰ろう」

真咲が言うと、女の子が不思議そうに首を傾げた。

「おねーちゃん？ おにーちゃんじゃないの？」

例によって男の子にも見えるような格好をしていたから、勘違いされてしまったようだ。

「うん。そうだよ」

苦笑いをしてそう答えると、女の子はまだ疑ってるかのように「ホントに？」と眉を顰めた。

ゆっくりと立ち上がったので、女の子を壁際に隠しながら、のんびりとしたスピードで歩いた。

何て名前なの？ きらら。へえ、かわいい名前だね。

そう言うときはらは相当嬉しかったようで、真咲に向かって「きらねえ、なつ休みのあいだにじてんしゃのれるようになったの」「きらら、お兄ちゃんが大すきなんだけど、がっこうであうといつもいじわるなの。なんでかなあ？」などと話し出した。

さっきまで泣きそうだったのに、もうニコニコと笑っている。そんな表情を見ながら、「誰かに似てるなあ」と思ったが、それが誰なのかは分からなかった。

10分ほど歩いたところで、きららが「あ、あそこおうち」と指をさした。

指し示す先にあったのは、だいぶ老朽化した一軒家だった。真咲が住んでいる家の周辺よりも、この辺は街並み全体が古い感じがしたが、その中でも特に年季が入っている。ガレージには軽のワゴンが泊まっており、中には脚立や工具などがぎっしりと詰められているのが見えた。なにか商売でもやっているのだろうか。

「ここ？」

「うん！」

ここまでの道のり、幸い人通りも少なく、たまにすれ違う人もきららの様子がおかしいことに気づいた様子はなかった。

家の前まで来ると、じゃあね、言って別れた。門の中できららは、真咲の姿が見えなくなるまで手を振っていた。

さて、と真咲は足を止める。きららと喋るのに夢中になってしまっ
て、どっちに行ったらいいのか全く分からなくなってしまった。
なるべく短い距離で帰りたい。この辺の道に馴染みはないが、あ
っちが西だからこっちの方面だろう、と適当に当たりをつけて歩き
出そうとした。

その時――

「鳴原！」

呼び止められて再び立ち止まる。振り返ると、道の向こうから自分の元に駆け込んでくる人の影が見えた。

久慈昂だ。なんで自分がここにいたことが分かったのだろう、と驚きを隠せずにいると、久慈は真咲にぶつかる寸前でストップし、息を切らしながら真咲のことを見上げた。

「……お前だろ、きららのこと、送ってくれたのって」

クラスメイト (3)

久慈に「ちょっといいか」と言われ、しばらく並んで歩く。

本当は日が暮れる前に早く帰りたいかったが、断り切れず仕方なく近くの公園のベンチへ一緒に座り込んだ。

きららと同じ年ぐらいの子たちがブランコを漕いで競争をしている。その奥には、赤く染まった夕焼けが見えた。

誘ったくせに久慈は自分からはなにも言葉を発しない。耐えきれず真咲は、こちらから切り出した。

「……なんでわかったの」

きららに名前は言ってないはずだし、自分は転入してきたばかりだから以前から顔を知っていたとも考えにくい。

真咲の問いに、久慈は表情一つ変えず答えた。

「きららが、『男の子みたいなおねーちゃんが送ってくれた』って言ってたから」

そして再び黙り込む。改めて見てみれば目の形も細い顎のラインも、きららと久慈はそっくりだ。何故兄妹だと気が付かなかったのだろう、と自分の迂闊さに啞然とした。

しかし久慈は呼び出して置いて一体なにがしたいのだろう。ケンの続きなら御免だ。「やっぱ帰る」と腰を上げようとしたとき、

「……きららが、迷惑かけて、悪かったな」

意外に低い声でそう呟いた。

「いや、別に……」

謙遜でも何でもなくそう答える。

行成がはじめてあったとき自分にしてくれたこと、それを自分も他の人にやったまでだ。

声を掛けたとき、きらは心細さに目を潤ませていた。あの様子を見たら、誰だって放っておけないのではないだろうか。

「ホントに、これぐらいなんでもないからさ」

「……ん」

「妹さんのこと叱らないで置いてほしいんだ」

久慈が驚いたような顔で真咲を見た。真咲は構わずに続ける。

「本人も、辛いと思うから」

きっとあれぐらいの歳の子だったら、ちゃんと反省もできているし後悔もしてるはずだ。

特に兄である久慈のことは「大好き」とまで言っていた。そのような人物になじられたら、いくらなんでも居たたまれないだろう。

「ああ、わかった……」

久慈がそう答えたので、真咲はホッと胸をなで下ろした。

「んじゃ」

「ちょっと待て、鳴原」

ふたたび立ち上がり掛けた真咲の手を、久慈が掴んだ。

ぎよつとして振り返る。

「このこと、みんなには言わないでくれよ」

縋るように必死な声の響きに、真咲は思わず息を呑んだ。

久慈が気まずそうに俯く。しかし一旦切り出すと、彼は堰を切ったように一気に吐き出した。

「あいつさ、あんな風に鈍くさいから、学校でも友達あんまりいないみたいで」

「お前と違って、作ろうとはしてるみたいなんだけどさ」と情けなく笑いながら続ける。

別に作ろうとしてないわけじゃないんだけど……と思ったが、反論するような雰囲気でもなかったので仕方なく言葉を飲み込んだ。

「こんな事があつたって知れたら、ますます遠のいちゃうと思うんだ」

久慈は久慈なりに妹のことを案じているらしい。確かに久慈にしてみれば、自分に恨みがある真咲に弱みを握られてしまって、言いふらされないか不安で仕方がないのだろう。学年が違うとはいえ、そんなに大きくない学校だから、噂を広めようとすれば簡単にできる。

だけど――

「……言わないよ。ていうか、言う相手がいないし」

久慈本人のことは憎いが、その妹には関係がない。それに、人の悪口を言って足を引っ張るほど、自分は最低な人間ではない。

真咲の断言に、久慈はすこしはにかんだように笑った。

「……ありがとう」

握られっぱなしだった手が離れていく。その手を開いた膝の上に乗せると、久慈は勢いよく頭を下げた。

「あと、さっきはごめん」

素直な謝罪をされて真咲は戸惑った。

本音を言えば、まだ久慈のしたことは許せない。けれどここでもた怒りを再燃させたところで、標本は元には戻らない。できればもう忘れてしまいたい。

——それに、自分は『友達ができるよう頑張る』と行成に誓った。久慈は男子で、あまり仲良くなれそうにはないが、これでも一応クラスの仲間なのだ。

堪えろ、と自分に言い聞かせ、真咲は口を開いた。

「いやまあ、終わったことだし」

それだけ言うと、真咲は踵を返して公園を出て行こうとした。

その背中に、また声が掛けられる。

「鳴原」

今度は何だ……と振り返る。すると、久慈はベンチの所に立って、こちらに向かって高く手を掲げて振っていた。

「また明日」

「うん」

控えめに手を振り返す。夕陽の逆光になって、久慈の表情までは見えなかった。

一週間ぶりに行成のアパートを訪れると、少しの間帰省していた行成から手みやげを渡された。よくあるチョコのお菓子の、地域限定版だ。

お腹が空いていたのでさっそくそれを空けて食べた。彼の実家であつたあれこれを通り聞いたあと、ばつの悪い思いで学校での出来事を告げた。

「あー、なに？ アレだめにしちゃったって？」

「教室に置いたと思ったら、クラスの男子がふざけて割っちゃって……」

言い訳がましくそう付け加えると、行成はあんぐりと口を開けて真咲の顔をまじまじと見つめた。

「それでお前落ち込んだの？」

「ごめん、ユキナリ。せっかく協力してもらったのに……」

手を付いて頭を下げる。顔を見るのが怖い。せつかくの厚意をないがしろにしてしまった自分は、軽蔑されても仕方がないのかもしれない。

すると耳に聞こえて来たのは、いつも通りの軽い口調だった。

「ま、それはいいけどさ、お前も相手の子も、怪我とかなかった？」

顔を上げて首を振る。目の前の人が全く怒っていない事に少なからず安心し、また若干の違和感を覚えた。

「じゃ、まあいいだろ。また機会があったら作ればいいよ」

あの金魚は帰ってこないけどさ、と言い添えて行成が笑う。

またの機会……、そんなものが訪れることがあるのだろうか。彼にとってあの夏の日々は、そんなに簡単に替えが効くほど、軽いものだったのだろうか。

(だけど……、まあいつか)

標本よりも自分の身を心配してくれたことは嬉しい。今まで誰も、そんな言葉を掛けてくれる人はいなかった。

……もしかしたら、本当にあそこまで怒るようなことでもなかったのかもしれない。割れたビンで怪我はしなかったけれど、ケンカして多少の傷は負ったし、相手にも負わせてしまった。

真咲は今さらながら、「久慈くん、ごめん」と心の中で謝った。

「それよりさ、お前今月末ちょっと時間取れる？ 夕方からなんだけど」

突然の申し出に「えっ」と言葉を詰まらせる。

夕方から……。日にちにもよるが、母親が夜勤の日が週に1回程度はある。これに当たれば夕方から出てくることも可能だ。

しかし何故そんなことを聞いてくるのだろうか。「なんで？」と尋ねると、彼は頭を掻きながら「あー」と言葉を濁らせた。

「いや、お前『野球の試合見たことない』って言ってたじゃん」
「うん」

「今度さ、連れてってやろうかと思って。面倒だったらいいけど」

（ユキナリと……、一緒に！？）

真咲は急に瞳をいきいきと輝かせはじめ、行成の腕を強く掴んで揺さぶった。

「行く！ 絶対行く！ いつ？」

「ちよっと待て……、まだ調べてないからわかんないけどさ」

ねえねえ、ドームと球場どっち？ ドームは無いな。乗り換え面倒だし。それじゃ、てるてる坊主作つとかなきゃ！

先程までとは打ってかわってはしゃぎだした真咲に、行成は目を細めて苦笑した。

「お前……、そんなに見てみたかったんだ」
「うん！」

勢いよく答える。

真咲の本当の気持ちなど知る由もない行成は、「ユニフォームでも借りてくっかなあ」と暢気に呟いた。

月夜とカクテル光線 (1)

「……なあ、嶋原。今日のお前なんか変じゃね？」

給食の時間、デザートプリンを食べていると、前に座っていた久慈が呆れたような口調で言った。

久慈は、この前行われた席替えで、元はくじ引きで違う席だったのを、「後ろの方だと黒板が見えない」と一番前の席になった真咲の隣にわざわざ移ってきた。

「黒板も何も、あんまり授業聞いてないのに」と真咲は思ったが、最近では一学期のころとは人が変わったように勉学へ真面目に取り組んでいる。

そして給食は、席の近い者同士で班になり机をくつつけて食べるので、これまた久慈と同じ班になってしまうのだ。

「そうかな」と真咲がお茶を濁す。久慈は「そうだよ」と訝しげに口を尖らせた。

「だってなんかずっとニヤニヤしてるし、さっきも算数の問題聞いたら『これはね〜♪』って機嫌良かったじゃん。いつもはすげえ面倒くさそうにするのに」

それは気が付かなかった。いつもと同じく振る舞っているつもりだったが、つい態度には出てしまっていたらしい。

今だって鼻歌歌ってたぜ、と言い足され、顔を赤らめる。すぐにポーカールフェイスに切り替えようと頬の筋肉を固くするが、気を抜くと途端に緩んでしまう。

「何かいいことでもあったのかよ」

「いいこと？　だって今日は……」

「今日？」

言いかけて慌てて口をつぐむ。

未だに疑っているような久慈の視線に「何でもないよ」と言い訳すると、残りのプリンを掻きこんで、「今日図書館整理の当番の日だからもう行かなきゃ」と逃げるように席を立った。

（あぶない、あぶない。つい言いそうになっちゃった）

廊下を早足で通り抜けながら、真咲はぺしぺしと自分の頬を叩いた。

今日は、行成がナイターに連れて行ってくれと約束した日だ。この日のために、お小遣いも使わず貯めてきたし、野球のルールを予習して備えてきた。

このことは、ほとんど誰にも言っていない。唯一テレビで野球の試合を熱心に見ている真咲に「お前、何でいきなりそんなに興味持ち始めてるんだ？」と尋ねてきた叔父さんへの、他言しないことを条件に「今度友達と一緒に見に行こうって誘われた」と打ち明けた。だがそれ以外は、母親もクラスメイトも、月にいる父ですらない。

（早く、夕方になんないかな）

こんなに楽しみな放課後は久しぶりだ。浮き立つ足下と早くなる鼓動を感じつつ、階段を一段抜かしで駆け下りた。

「ユキナリ！」

球場の最寄り駅の地下鉄の改札を出て、待ち合わせをしていた行成を見つけて手を振る。彼は珍しくシャツにネクタイを締めていて、壁にもたれて携帯電話をいじっていた。

行成は「おお」と軽く手を挙げると、携帯電話をポケットにしまつて真咲の元へと駆け寄った。

「ごめんね、ちょっと遅れて」

「まあいいよ。つーかよくここまで来られたな」

「うん、これくらい出来るよ。だってもう六年生だもん」

生意気な真咲の台詞に、行成は「ハハッ」と目を細めて笑った。

駅を出て日暮れ間近のオフィス街を歩く。球場が近づくにつれユニフォームや野球帽を被った人の姿が目につくようになってくる。大きな森のような広場を抜けて入場ゲートに付くと、行成があらかじめ買っておいたというチケットで球場内に入った。

「わあっ！！　すごい！　思ってたより広いだねー！！」

コンクリートの階段を上り切り観客席に躍り出て、真咲は思わず声を上げた。今日はビジターが行成がかつて応援していた地元の球団とのことで、三塁側の内野自由席に座った。

試合前のこの時間、フィールドではホームチームが守備練習をしている。平日なので客の入りは4割程度といったところか。客席では早くもビールの売り子が声を張り上げている。

「あっ、坂巻コーチだ。テレビで見ると同じだ！」

「うわっ、ボール飛んできた！ 超こわい！」

珍しく興奮して真咲がまくしたてる。その傍らに大きな黒いトートバッグが置いてあるのを見て、行成が尋ねた。

「なんか荷物多いな。何入ってんだ」

「えーとね、おじさんが、これ持ってけて」

そう言っ取り出したのは週刊誌サイズの選手名鑑と、2本のサイダーの瓶。

「はい」とサイダーの1本を行成に渡す。行成は水色のガラス瓶に貼られたラベルを困惑気味に凝視した。

「なんだこれ。見たことないな」

「うん。なんかね、叔父さんが出張のお土産にくれた。『友達と分けろ』って。おいしいみたいだよ」

「……ありがとう。だけど、これって冷やして飲んだ方がいいよな」

行成が瓶を受け取り、首を捻った。一体こんなものを持たせて、真咲の叔父は何がしたかったのだろうか。

納得いかない様子で瓶をカバンにしまうが、真咲は特に何の疑問も抱いていないようだ。

今日の先発は……と選手名鑑を見比べているところで、場内アナウンスが大音量で響き渡った。

スターティングメンバーが次々とコールされる。颯爽とグラウンドに向かう選手達を見て、行成は視線を鋭くさせた。

「さあ、いよいよだな」

＊＊＊

試合は序盤、優勝戦線を争っているビジターチームと、Aクラス入りを目論むホームチーム、両チームの意地を賭けたエース同士の投げ合いとなり、息のつまるような展開となった。

ちょこちょことたこ焼きなどをつまみつつも、試合の行く末に目が離せない。三回表の攻撃が終わったところで、行成の携帯電話に着信が入った。

「ちよつとごめん」

そう断って席を立つ。少し離れた所から「ああ、面接が終わって」「いま三塁側」などと告げる声が聞こえてくる。

落ち着かない気持ちで足をばたつかせながら隣に行成が帰ってくるのを待つ。

通話が終わると真咲は、「どうしたの」と行成に尋ねた。

「いや、さ。俺の知り合いがさ……」

言い終わるが早いか、二人の後ろから大きな声がした。

「矢野ちゃん！」

月夜とカクテル光線 (2)

声の方を振り返ると、入り口の方から眼鏡を掛けた男と、髪の長い楚々とした女性が階段を下りてきた。

行成は立ち上がって通路へ出ると、二人を出迎えた。

「矢野ちゃん、この前見に来るとか話してたけど、今日だったんだ」
「誰と来てるの？」

あいつ、と行成が自分の方親指で指し示した。自分だけ座っているのも妙かと思いい後を追っかけて席を立つと、彼の近くに佇んで「こんにちは」と頭を下げた。

「マサキ、こいつら大学のゼミの仲間。……つつつても本当は一個下だけだ」

「ゼミって何だろう」と真咲は首を傾げたが、聞くよりも先に女性の方が尋ねてきた。

「可愛い子だね。矢野君のごきょうだい？」

「いや、近所のがき。ナマで野球見たことないっていうから、連れてきた」

ふーん、と言ってその女性はまじまじと真咲の方を見た。

白いジャケットに揃いのスカート、きっちりしたハイヒールはいかにもお嬢様といった印象の女性で、野球応援に来るには少々品が良すぎる感もしたが、化粧のほどこされた顔はとにかく美しい。行

成ももう一人の男性も、彼女に気を遣っているのがありありと分かる態度だ。

まだ見られている。気まずい。あまり顔を凝視されると、男の子でないことがバレてしまいそうで俯いた。

男性の方が一塁側を指さして言った。

「俺ら、向こうの自由席にいるんだけど、一緒に見ない？」

えっ、と真咲は下を向いたままの顔を強ばらせる。

「えー、でもあっち敵側だろ。ちょっと怖ええな」

「大勢で見た方が楽しいよ。他にも、そっちのファンいるよ」

「ていうか矢野ちゃん、あんまゼミの集まりこないじゃん。たまには親睦深めようよ」

多少強引とも言えるような台詞で行成を誘う。

「あー……」

顔を上げると、少し困ったような顔をした行成と目が合った。

ぎゅっとシャツの後ろを握る。行成が、一瞬だけこちらに向かつてはにかんだ気がした。

「やっぱ今日はやめとくわ」

そう言うのと、男性はあからさまに残念そうに「えー」と肩を落とした。

「また誘ってな」と柔らかいがきつぱりとした口調で言うと、二人はとうとう諦めて帰っていった。

「ユキナリ、いいの？」

席に戻ると、さすがに心配になってしまい聞いた。気が付くととくに試合は再開されている。行成はビールの売り子と呼ばれ止めると、ポケットから財布を取り出した。

「ああ、いーんだ」

「でも……」

あんな風に熱心に誘ってくれたのに、断ってしまったって今後の立場が悪くなったりしないのだろうか。

一人前に気遣いを見せる真咲に、行成は売り子より釣り銭を受け取りつつ、上の空で答える。

「いいんだ、いいんだ。どうせまた機会なんていくらでもあるし。それに、お前、人見知りだろ」

こぼれそうになるビールの泡に口を付ける。白い泡の髭が鼻の下にお目見えした。

「知らない大人に囲まれて見ても、あんまり面白くねーだろーしな」

凶星をつかれて思わず黙り込む。行成が友達よりも自分を優先してくれたことを知り、体温が上がってクラクラしてきそうだった。

「なんか暑くない？」

「そうか？ 俺ちよつと寒いんだけど」

さすが若いだけあるなあ、と言ってまた苦笑する。ビル街なので星は見えないけれど、たまに吹く乾いた風はその夜空が晴れていることを予感させた。

「打ったー！ 回れーっ！」

「おおっ、追いついた！」

カクテル光線に照らされて、芝生もボールも、グラウンドを動き回る選手達のユニフォームも客席の人々も、全てがキラキラしていた。覚えやすい応援歌が繰り返し響いて、まるで夢の中のお祭りにいるみたいだった。

隣の行成は首元のネクタイを緩めてはいたが、きちっとした服装のせいか、普段よりちよつと格好良く見えた。そしてビールを何杯も飲んで、いつもに増して良く笑う。

（ユキナリ、ユキナリ）

ずっとその横顔を見ていたいと思った。一瞬が永遠で、永遠が一瞬のようだった。

テンポ良く試合は進んでいたが、両者一步も譲らず、同点のまま最終回を迎えた。

「もう9回か」

スコアボードと時計を見比べて行成が呟いた。

「延長になってもこの回で帰るか。お前明日も学校だよな？」

残念だけど仕方がない。うん、と頷いて食べかけの串カツを押し込む。

9回表、ビジターチームの攻撃は、先頭バッターが長打を打って2塁に出たものの、続くバッターが相次いで打ち損じてしまい、気が付けばツーアウトになってしまった。

楽しかったけど、肝心の試合は勝てそうにないな、などと思っていたところで、場内アナウンスが鳴り響いた。

「8番、吉田に代わりまして、代打・藤武。背番号・63」

「えっ……」

それまでヘラヘラしながら試合を見ていた行成の顔つきが急に変わる。

「まだ現役だったのか」

「知ってるの？」

真咲が尋ねると、彼は視線を「63」から少しも外さずに答えた。

「藤武は、俺が子供の頃からやってる選手だ」

へえ、と手元の選手名鑑のページを捲る。藤武の項には「5年ぶ

りに古巣に復帰。崖っぷちのベテラン選手は今年が正念場」などと辛辣なコメントが書かれていた。

スコアボードには「A V R ・ 1 7 3」の絶望的な数字。3塁側の応援席からも「じじい、ひっこめ」などの心ないヤジが飛ぶ。

1球目。ギリギリのコースだったがストライクを取られた。

「あー」と落胆のムードが客席に漂う。

「……っ！」

行成は突如席を立つと、最前列まで一気に階段を駆け下りた。

「どうしたの」

慌てて追う。行成を見ると、彼はフェンスを掴んで、指が食い込むほど強く握りしめていた。

2球目。ボール球を振らされてこれで2ストライク。

一旦打席を外してスウィングする。

ピッチャーが片足を挙げて投球モーションに入る。3球目。

「藤さん、頑張れ！」

行成が叫ぶ。祈るに近い響きだった。

応援団の応援も一旦鳴りやんだ、その時だった。

「ガッ」という鈍い音と共に、白いボールが早足で内野を駆け抜けていく。遊撃手と3塁手の間を破った。長打コースだ。

「いけー！」

外野手がやっと追いついた。3塁コーチがぐるぐると腕を回す。

2塁ランナーがホームに突っ込んでくる。間に合うか!?

「セーフ!」

主審のジェスチャーと共に、客席が怒濤のような歓声に包まれた。それまで座って見ていた観客も、一斉に立ち上がって喜び合った。勝ち越した。

「やった!」

行成が顔をくしゃくしゃにして笑う。向かい合ってハイタッチをすると、その勢いで広げた腕に急に抱きしめられた。

(う、うわー!!)

「藤さん、ホントに良くやった」

感極まった涙声で行成が漏らす。一方の真咲は、「自分も抱き返した方がいいのだろうか」とその事ばかりが気になっていた。

9回裏は抑えピッチャーが見事攻撃を3人で打ち取り、試合はピジター側の劇的な勝利で幕を閉じた。

ホームではなかったのでヒーローインタビューは行われなかったが、記者団に取り囲まれて誇らしげにしている藤武の様子を、行成は遠くから眺めていた。

客席を出ると、「一応あいつらに挨拶してくる」と言って行成は人の流れに逆行した。ゲートの前に居るように命じられたので、壁にもたれながら彼が戻ってくるのを待った。

人の波をなんとなく観察する。一塁側から出てきた人々は疲れたような顔をしていて、反対に自分たちと同じ方から来た人はほんの少しテンションが高いような気がした。

と、すぐ近くのお手洗いから出てきた人を見て、真咲はぎくりと顔をしかめた。まさか、と思ったが真咲が身を隠すよりも早く、向こうが真咲を見つけてしまった。

「鳴原！」

大声で名前を呼ばれ、無視するわけにもいかず恐る恐る振り返る。そこには久慈昂が、驚きと好奇心が入り交じったような目で真咲を見ていた。

「あ、偶然だね……」

月夜とカクテル光線 (3)

久慈は真咲の元に駆け込んでくると、何故か興奮した様子で捲し立てた。

「お前も野球見るんだ」

「う、うん」

こう聞かれるのも無理はない。隣の席になってしばらく経つが、野球を始めとするスポーツの話題を、二人はしたことがなかった。

「久慈君こそ、なんでこんなところに……」

「ああ、俺は親父が好きだから、たまに連れて来られる……」

そこまで言うと、久慈は首を傾げながら尋ねた。

「誰と来てんの？」

「えー……と」

言葉を濁す。同行者の行成は、親戚でもなければ共通の知り合いがいるわけでもない。しかし「友達」と呼ぶには歳が離れすぎているし、自分としても彼の存在をそれだけでは括れない。

それにこうしてる間にもうっかり行成が帰ってきたらどうしよう。久慈は空気が読めないからきっと余計なことを言ってしまうだろう。どうやって追っ払おうかと必死に頭を回転させていると、久慈の背後から野太い声がした。

「昴、お前こんなとこいたのか！」

「あっ！」

久慈が「ゲッ」と顔を顰めた。

人混みから体格がよく厳つい顔をした男性が現れて久慈の真後ろに立った。目の色や耳の形など似ているところはあったが、全体的に大きくて骨太で、小柄で線の細い久慈とは随分と雰囲気異なる人物だった。

久慈が「オヤジ」と素早く紹介したので、真咲は男性に向かってぺこりと頭を下げた。

「初めまして、鳴原です」

「鳴原……」

久慈の父はそう呟くと、それまで不機嫌そうだった顔を崩して目尻を下げた。

「あー、君が真咲ちゃんか！」

「え？」

黙っていると怖い印象だったが、笑うと急に人懐こくなる。

意外な反応に戸惑っていると、久慈の父は「ガハハ」と豪快に笑って更に続けた。

「うちの昂がな、最近『真咲が、真咲が』ってよく家で話してるんだよ。いやー、噂通りべっぴんさんだな！」

この年にしては物知りだが知識にムラがある真咲は、「べっぴん」の意味が分からず、とりあえず悪い言葉ではなさそうなので曖昧に笑うにとどめた。

父親から飛び出した爆弾発言に、久慈本人があたふたしながら言い添える。

「誤解すんなよな！ きららがお前の名前聞いてきて、教えたられから『まさきちゃんのお話聞かせて』ってしつこいから……」

「へえ、そうなんだ」

別に不思議ではない。世の中には、何でも家族に打ち明ける子は多いと聞く。自分は母親とあまり話をしないが、仲が良かったらもうすこし喋るだろう。

それに久慈の言うとおり、妹にも顔を知られている自分は、他のクラスメイトに較べて話題にしやすいのかもしれない。

しどろもどろで顔を赤くする久慈を、父親はニヤニヤしながら小突いた。

「お前、照れてるな〜？」

「うっせーなジジィ！ 早く向こう行けよ！」

キレかかりつつそう反撃した久慈だったが、父親に敢えなく首根っこを掴まれてしまった。

「何言ってるんだ！ おめーも帰るんだよ！」

ずるずると久慈を引きずりながら、久慈の父は爽やかな笑顔で手を振った。

「真咲ちゃん、うちのバカ、これからよろしくな！」

「じゃーな、嶋原。また明日！」

「うん、バイバイ」

二人に向かって手を振り返す。賑やかな親子の姿が人混みに紛れて見えなくなったところで、すぐ近くから聞き慣れた声がした。

「おう、待たせたな」

行成が戻ってきたようだ。ギリギリ間に合った、と安堵の息をつく。もしもう少しでも早かったら、行成のことを久慈に知られるところだった。

真咲は穏やかな笑顔で「おかえり」と言うと、駅までの道のりをいつもより遅めのスピードで歩き出した。

電車が地元の駅に滑り込む。改札を出て長い商店街のアーケードを抜けると、街はすでに人影も少なくひっそりと静まりかえっていた。

もう少しで家に着いてしまう。真咲は長いようであっという間だった今日のことを振り返る。

「今日の試合、すごい楽しかったね」

初めて生で見る試合の迫力には圧倒されたし、大好きなB級グルメもいくつか食べられた。

本当はタコスにしておけば良かったな……と思ったが、たこ焼きもモツ煮も、十分おいしかったのでそれでよしとしよう。

「そっか。連れてってよかったよ」

行成が軽いため息をついた。行成と一緒に行ってつまらないわけがないのに、そんな風に言う気持ちに真咲にはよく理解できなかった。

た。

「俺も、まさか生きてるうちに藤武の晴れ姿もう一回見れるとは思わなかった」

「……なんか、さっきもそんなこと言ってたね。どういう選手なの？」

藤武が代打で出てきたとき、行成の目の色が明らかに変わった。そんなに曰くのある選手なのだろうか、と思って尋ねると、彼は声のトーンを落として言った。

「小さい頃、藤武は俺らのヒーローだったよ」

うん、と言葉を挟む。随分と深い思い入れがありそうなので黙って次の言葉を待っていると、彼はぼそぼそと語り始めた。

「小学生のとき……、今のお前なんかよりもまだ小さかったんだけど、同級生たちと一緒に球場まで見に行ったことがあって」

そう言えば、「野球を見に行ったことがない」と言ったとき、行成は随分と意外だったようだ。彼のように地方出身で、その地元には球団があるものにとっては、野球観戦はとても身近なことなのかもしれない。

「試合始まる前の練習中に、『藤武ー、今日こそヒットうてよー』って観客席から騒いでたら、あいつわざわざこっち来て『お前ら、呼び捨てじゃなくてさん付けろ』って言い返してきたんだよ。だから『藤さん、頑張って』ってみんなで言い直したら、『おう、やるよ！』って手を挙げて応えてくれた」

だからさつき「藤さん」と呼んでいたのか、と納得した。プロに向かって「今日こそ」と言ってしまう子供も大概だが、藤武も相当大人げない。

行成はまだ続ける。

「sondeその日、藤武はホントに打ったんだ。大事な場面で」

くつと切なそうに目を細める。泣いてしまうのかと思って、真咲は一瞬どきりとした。

「ヒーローインタビューでさ、『今日は、応援しに来てる子供たちのためにも頑張りました』って言うってくれて、それがすげー嬉しかったんだわ。だからもう、俺とかその友達は大ファンになっちゃったんだよね」

それであんなに決勝打を打ったとき興奮していたのか、と納得した。話を聞いているだけの自分でも応援したくなってしまうようなエピソードだ。

「いい人なんだね」と相づちを打った真咲に、彼は「うーん」と首を捻ってから答えた。

「でも、その後、FAとかで球団とモメたりもしてたんだよね……。それでもやっぱ、あの時のことは忘れられないもんなんだな」

子細に語るその様子から、きっと彼は、その時のことを何回も思い出しているんだろうことが伺えた。

できれば自分もその試合と一緒に見たかった。――その頃自分は生まれてすらもいなかったのかもしれないけれど、なんならタイムマシンにでも乗って、小さかった行成と同じ興奮を味わってみたいと思った。

それが出来ないんだったら、せめて――

「また、見に行きたいね」

そう言って行成を見上げた真咲の頭を、彼はぽんぽんと優しく叩いた。

「そうだな。また来年だな」

「やっぱ今年はもう無理かなあ」

残念そうに呟いた真咲に、行成は苦笑いをして返す。

「うーん、日程もアレだし……。それに、お前勉強しなくていいのか」

えっ、と言葉に詰まる。世間的には「小学生の本分」遊び」と思われると感じていただけに、行成の言葉は意外だった。

なんで、と逆に聞き返した真咲に、彼は「あれ？」と嘯いてから答えた。

「受験、するんじゃないの」

月夜とカクテル光線 (4)

いつの間に知られていたんだろうか。前に本屋で受験関係の本を立ち読みをしていたときに見られたのかもしれない、と思い出す。

あの時は受験する予定の女子校のことを調べていたのだが……。その後のことを思い返してみても、「そのこと」に気づいてる様子はなかった。

だけど自分は迂闊だった。もし自分の性別がバレたら今頃どうなっていたんだろう、と肝を冷やす。

「……うん。一応……」

真咲は力なく答えると、その場に立ち止まってしまった。

「おや」と足を止めて行成が尋ねる。

「どうした。受験するの、イヤなのか」

「そうじゃないけど、ちょっと……」

来年——そう言われてもピンと来ない。だけれども、来年の春には自分は中学校に上がっている。その頃まで彼に本当のことを言えないまま、今と同じように一緒に居られるのだろうかと自問する。

答えはよく分からない。嘘をつきつつけるのは辛い。けれど、女の子だと知られてどうなるかは全く予想できない。先のことを考えると、いつそ今のまま時が止まってしまえばいいとさえ思う。

明らかに元気を無くしてしまった真咲を勇気づけるように、彼はわざと明るく声を張った。

「その代わり、志望校に受かったら、球場でおに——さん何でも好きなものおごってあげるから」

真咲は俯いていた顔を上げて、彼の台詞に食らいついた。

「ホントに？」

「ああ。ピザでもおでんでもなんでもいいよ。かき氷……の季節にはまだ早いと思うけど。とにかく、アルコール以外なら、なんでも」

力強い言葉に、真咲は恐る恐る小指を差し出して言った。

「……じゃあ頑張る。絶対忘れないでね。約束だよ」

ゆびきりげんまん、と小指同士を絡ませる。

（自分が女の子でも？）

そう聞いてみたい気がしたが、月明かりに照らされた彼の笑顔があんまりにも柔らかくて、声が喉に詰まって何も言えなかった。

小指を繋いだまま、再び二人は歩き出した。

「それと、春になったら釣りにも行きたいな」

「釣り？ やったことない！ 超行きたい！」

「だろ？ ちょっと遠いけどさ、知り合いにいい穴場教えてもらったんだよ。新鮮な魚はうまいぞ」

「へー、何が釣れるの？」

「アイナメとかカレイとか……、あとポイント選べばイカなんかも釣れると思う」

うきうきと弾んでいる行成の声に、こちらの心まで浮き足立ってしまう。途端に春が来るのが楽しみになってくる。

「それで、釣ったやつで、また標本作ったりしようか」

付け加えるようにこぼした一言だったが、本当はそれが言いたかったのかもしれない。

彼は覚えていた。標本を壊して凹んでいたことを。そういうさりげない優しさが、どうしようもなく嬉しくて、少し、悲しい――

「……うん！」

切なさを振り切るように真咲が勢いよく答えると、行成は満足そうに笑って空を仰いだ。

「今日は、月がよく見えるな」

つられて上空を見上げる。墨を流したような夜空には、丸い月だけが孤独に浮かんでいた。

「マサキ。お前の父ちゃんってどの辺にいるんだろうな」

「わかんない……けど、月のうさぎがいるところ？　その近くにきつというと思う」

思い起こせば動物が好きな父だった。テレビに動物が映ると「可愛いね」を連発していたし、小さい頃は動物園にも何度か連れて行ってもらった。

行成と出会ってから語りかけることも少なくなってしまったけれど……。今日も父は月からこちらを見ているのかもしれない。

真咲の言葉をすこしも揶揄することなく、行成が呟いた。

「そっか。じゃあ静かの海あたりにいるのかもな」

耳慣れない言葉に、真咲がぴくりと反応する。

「海？ 月に海があるの？」

「いいや。あの、黒くなってる模様のとこって、こっから見ると海みたいにも見えるだろ。日本人はうさぎって言うけど」

足を止めて月を凝視する。うさぎにも見えないが海にも見えない。うん、と話の続きを促すと、行成は落ち着いた口調で説明した。

「だから大昔の天文学者は、あのぼこぼこ一つ一つに『何とかの海』って名前を付けたんだ」

その一つが静かの海な、と言い足す。太平洋とかオホーツク海と違って、なんだか詩的な名前だな、と真咲は思った。

「でも実際月に降り立ってみたら、水なんて全然なくて、あるのはただゴツゴツした岩場だけだったんだけど」

それを聞いてがっかりした。もし月面に海があったら、父は今ごろその浜辺で、自分より一足先に釣りを楽しんでいたかもしれない。

「それじゃ、魚もないんだね」

不服そうにそう漏らした真咲に、行成はまたも苦く笑って答えた。

「海って付くのは名前だけで、ニセモノの海だからな」

何気ないその言葉に、何故だか胸が抉られたように痛くなった。

再び歩き出すが、彼の一言が心を突き刺して消えない。

（名前だけの、ニセモノ）

静かの海が本当の海でないことを知って、自分は少なからず落胆した。事の真相を知ることが、時に期待と予想を大きく裏切ることになる。

だとしたら、男の子みたいなのは見た目と名前だけで、本当のことを隠している自分は――

ニセモノなんかじゃない、と否定する。けれども、真実を告げてなお、彼に拒絶されないという自信が、自分の中にはどうしても見つけられなかった。

頼りなく繋いだ指先だけが、真っ暗な闇を照らす一筋の光のように思えた。

Puppy Love (1)

キンコン……と下校のチャイムが鳴る。校庭や体育館ではまだ運動部が部活をやっているが、校舎内には人影も少ない。

真咲は「そろそろ帰るか」と図書館で読んでいた本を戻す。ランドセルを背負って階段を下って、昇降口でスニーカーに履き替えていたところで、真咲は急に声を掛けられた。

「ねえねえ、ちょっといい？」

振り返ると、髪の長い女のが笑顔を浮かべながら佇んでいた。どこかで見たことがある気がするが、同じクラスの子ではない。おそらく同じ学年なのだろうが、背は真咲よりも高く大人っぽい体つきをしていて、ぴったりにしたシャツにミニスカートを穿いた姿は、なんとなく目のやり場に困るな、と真咲は思った。

「えーと、2組の真咲ちゃん、だよね」

どうやら向こうはこちらのことを知っているようだ。何の用だろう、と狼狽える真咲に、女の子はフォローを入れるように口を開いた。

「あ、と、あたし隣のクラスなんだけど、知らないかな……」

「え……、あ……、ごめん……」

そうだったのか、とぼつの悪い思いがした。隣のクラスとは体育や課外活動などで一緒になることも多いが、ひとりひとりの顔を覚えるほど興味がなかった。

女の子は「別にいいよ」と苦笑すると、「あたし、前田愛実」と

自己紹介をした。

「真咲ちゃんのおうち、大井戸町だよね」

「そう……だけど」

「途中まで一緒に帰ろうよ」

いきなりの申し出にドキッと心臓が跳ねた。

何故家を知っているのか、とか今まで話したこともないのになん
でだろう、とかいろいろ聞いてみたい事があったが、とりあえず久
々に友達と下校することになり、嬉しくてつい「うん！」と即答し
てしまった。

家までの道のりを、おしゃべりをしながらのんびり進む。愛実
は都会っ子にしては歩くペースが遅く、いつもなら5分かそこらで着
く距離も、今日はその倍ぐらい時間がかかった。

一緒に歩き出してからしばらくして、「なんで住んでるところを
知ってるのか」と尋ねてみた。すると、「その辺でよく見かけたか
ら」という何の不思議もない答えが返ってきた。

「そういえば、真咲ちゃんって私立の中学受けるんでしょ」

「えっ……」

「この前模試受けてたよね。あたしも、受験するんだ」

ここでようやく、愛実が話しかけてきた理由が分かった。彼女は
中学受験をする仲間と情報交換がしたかったのだろう。

しかし自宅の場所にしろ、模試の会場での発見にしろ、案外見て

る人は見てるものだ、と愕然とする。これからあまり迂闊なことはできないな、と身が引き締まる思いがした。

「どこの塾通ってるの？」

「いや、まだ通ってない」

「えっ、そうなの？ この前の模試、ランキングに入ってたよね？」

すごいねえ、どうやって勉強してるの？ いつも何時ぐらいに寝てるの？ などと矢継ぎ早に聞かれる。問題集を片っ端から、10時にはいつも寝てる、と答えると、愛実は「はぁ」と感心したようにため息を漏らした。

「うわー、超うらやましい。あたしもそれぐらい頭良く生まれたかったよ」

「そう……かな」

素直な賞賛の言葉に、少し気恥ずかしくなる。羨ましいといえ、こちらこそ屈託のない愛実のような性格に憧れてしまうのだが。はにかんで笑いかけると、愛実はますます興奮したように拳を握りしめて捲し立てた。

「照れちゃって。ホントかわいいねえ、真咲ちゃんって」

「……いや、全然そんな」

「しかも久慈さんと仲良しとかって。いいなあ、代わってほしいよ」「えっ？」

「久慈くん？」と聞き返す。すると愛実は当然のように「うん」と頷いた。

訳が分らず首を傾げる真咲に、愛実はビシッと指を突き立てた。

「今日も体育の時間の時、一緒にしゃべりながらマット運んでたでしょ！」

「あ、それは……」

「あの時も、クラスの女子と『あの子、羨ましいね』って言ったんだよ！」

体育の時間が始まる前、たまたま先生の近くを歩いていた真咲は、用具運びに任命されてしまった。面倒だな、と思いながら重いマットを引きずっていると、久慈がどこからともなく現れて、「お前鈍くさいな」と言いつつもマットの逆側の端を持ってくれたのだった。それはいいとして、あの男子のどこにそんな魅力があるのだろうか。乱暴者で、一応女の子である自分にも手をあげるような奴だ。しかも背も低くて、愛実のような早熟な女子とはどう考えても釣り合いが取れない。

最近何かにつけて絡んでくるのでうざったいと思っていたぐらいなのだが。真咲は思わず「久慈くんのどこがいいの？」とストレートに聞いてしまった。

「えー、結構いいじゃん。運動会するとき、最後のリレーで白組のアンカーやってたでしょ」

「……うん」

何となく思い返す。真咲達の学校では運動会は秋ではなく5月に行われていて、言われてみればその時同じクラスの男子がリレーでものすごく頑張っていた気がする。

その頃は転入したてでまだ顔と名前が一致していなかったが、どうもそれが久慈昂だったらしい。

「結局勝てなかったけどさ。でもすごーい追い上げて、あの時の一生懸命さに思わず『かっこいい！』ってなったよ」

うつとりとそう語る。この調子では「自分は久慈にボコボコにされかかった」と言っても信じないのだろうな、と半ば諦めに近い気持ちで話を聞いていた。

「そうかなあ」と適当に相づちを打つ。すると愛実は急に足を止めて、真咲の正面に立って顔を覗き込んできた。

「……ねえ、真咲ちゃん。お願いがあるんだ」

「なに？」

真剣な表情に思わず息を呑む。困ったように顰めた眉毛が、年齢に不相応なくらい色っぽいな、と思った。

どんなことを頼まれるのだろうとドキドキしていると、愛実は何かをねだるように甘い声で言い放った。

「久慈くん、『誰か好きな人いる？』って、聞いてきてくれない？」

Puppy Love (2)

「——ツクシユン！」

ここ最近急に寒くなってきたせいか鼻がむずむずする。思わず出たくしゃみは、他に誰もいないガランとした理科室に響いた。

校庭から児童達の騒ぐ声が聞こえる。給食を食べ終えて、今は昼休みの最中である。

真咲は先ほどの授業中に、先生の目を盗んで久慈へ「聞きたいことがあるから、昼休みに理科室に来て」と書いた手紙を回した。

黒い天版の大きな机の前に座り彼を待っていると、ガラガラと扉の開く音がした。

入り口の方を振り返ると久慈は素早くドアを閉めて中に入ってきた。立ち上がって出迎えると、久慈も小走りで真咲の方へやって来た。

「何だよ、聞きたいことって」

ほんの少し声が弾んでいる。真咲は久慈の少し茶味があった髪とつむじを見下ろしながら、重たい口を開いた。

「あのさ、久慈くん」

「なんだよ」

「誰か好きな人って、いる？」

久慈の顔が真っ赤になる。

「いるっちゃあ、いるけど……」

「あ、そうなの」

久慈は下を向きながら照れくさそうに頭を掻いて言った。

「なんだよ、お前気づいてたのかよ」

「いや、全然」

はあ、と息を漏らす。なんでこんなことに、ともやもやした気分が渦巻いてくる。久慈にしたってあまり仲良くないクラスの女子に聞かれても、恥ずかしいし困るだけだろう。だけれども、愛実に「お願い」と懇願されて、「嫌だ」と断ることは出来なかった。

どうやって愛実に伝えようと思ひ悩んでいると、久慈は不可解そうに首を傾げた。

「どうかした？」

「……実は、他のクラスの女の子が久慈くんのこと気になってるみたいでさ」

「え、……ってことは、お前はそいつに頼まれたから俺に聞いたわけ？」

「うん」

真咲の同意に、久慈の顔色が見る見るうちに変わってくる。困惑しつつもやに下がっていた目元は、怒りのせいか眉間に深い皺が刻まれた。

「お前さあ、そんなこと他の子に言われて、別になんとも思わなかった？」

「え？」

「例えば俺がその子と付き合ってもいいって言ったら、どうするつもりだったんだよ！」

「うーん……、モテていいなあ、って思うけど」
「なんだよ、それ！」

キツイ口調で怒鳴る。あまりの語気の荒さに真咲はビクツと肩を震わせる。

やはり聞いたらまずかったか、と真咲はすぐに後悔した。最近は見目に見えたけれど、もともとは教師達も手をやいていた久慈だ。取り扱いには十分注意が必要だったのだ。

久慈は「人の気持ちも知らないで……」などとぶつくさ呟き、真咲を鋭い視線で睨みつけた。目尻には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「お前、俺が言ったこと、そいつに伝えなきゃいけないんだよな」
「あ……、うん」

「それじゃどこの誰だか知らねーけど、絶対にお前じゃないって、そいつに言っとけ！」

背を翻すと、荒い足取りで理科室を後にする。

ひとり取り残された真咲は、再び机の上に突っ伏して頭を抱えた。

午後の授業中、久慈は真咲と言葉を交わすどころか、目を合わせることすらしなかった。何が彼の逆鱗に触れたのかは分からないが、相当怒りの根は深いらしい。

帰り道、通学路からすこし外れたところにある行成のアパートの前を通りかかると、窓辺に洗濯物が干してあり、部屋の電気も付いていたので家にいるのだろうとチャイムを押してみた。

行成は「久しぶり」と笑って真咲を招き入れた。一緒に野球を見に行って以来、会うのは実に1ヶ月ぶりになる。

部屋の中は以前より片づいていて、行成の自身もそれまでと少し変わって見えた。なにか憑き物でも落ちたかのようにさっぱりとした表情。どんよりと暗い真咲とは対照的である。

行成が京都で買ってきたという紅茶を淹れてくれた。変わった香りのするそれをちびちびと飲みながら、真咲は思わず大きなため息を吐いてしまった。

「あー、どうしよう」

「……何かあった？」

「いや、隣のクラスの女の子に、この前声掛けられてさ」

自分のクラスメイトのことを気に入っているのです、彼に意中の者がいるかどうか確認してほしいと頼まれたこと、それをその男子に尋ねたら、何故か急に怒られたことを説明した。

「なんか、好きな人ならいるけど、お前じゃないって言うっておけ
て」

行成は片肘を突きながら頷くと、落ち込んでいる真咲の肩を叩きながら言った。

「うーん……。したら、そうやって正直に言うしかないんじゃない
か？」

「……やっぱそうかなあ」

「っていうか、お前がその女の子と付き合っちゃえば？ 大人っぽ
くて可愛い子なんだろう？」

……そういう問題ではないのだが。彼は自分を男の子と思いこん

でいるため、悩みのポイントをきちんと理解していない気がする。

「自分が付き合うとか、そういうのはちょっと……」

「そうか。まあ、それならなるべくソフトに遠回しに言えば？」

『お前じゃない』とか、そういう余計なのは省略しちゃってもいいだろ」

「そうかなあ」

「別にお前は悪いことしてないんだしさ。それでキレる方がおかしいだろ」

行成の提案に、少しだけ心が落ち着きを取り戻した。顔は若く見える行成だが、こういうところは流石に長く生きているだけはある。真咲は深く息を吸うと、改めて紅茶をすすった。改めて嗅いでみるとこの香りは林檎のものだと気づいた。

「実はさあ、俺もお前に伝えたいことがあったんだよ」

「えっ、なに？」

顔を上げて行成のことを見返す。彼は真咲と目が合うと、「ふっふっふ……」とタメを作ってからにんまりと相好を崩した。

「マサキ、よろこべ！ 就職、決まったぞ！」

「ホント!？」

行成が満面の笑みで頷く。「よかったねー」と祝福すると、行成は真咲の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「あー、もう。お前のお陰だよ！ お前がいつだったか、『おじさんのお土産』って言って持ってきてくれたサイダー、あったろ？」

嬉しくて仕方がない、と言った感じで行成が捲し立てる。

「あれがなかなか美味かったから、インターネットでどこの会社で作ってるのか調べてみたんだ。そしたら、その会社の取引先が、ちょうど新卒を応募してたんだよ！それでダメもとで申し込んでみたら、トントン拍子に話がすすんでさ。この前面接受けてきて、今日、正式に採用の連絡が来た」

ほら、これな、と封筒から紙を取り出してちらつかせた。うん、うん、と相づちを打ちながらも真咲は「自分のお陰でもなんでもない」と少し遠慮した気持ちでいた。

「来年からはしばらく本社で営業だって。いやー、むこうの暮らしってキツそうだけど、根性で乗り切るぜ！」

行成は真咲の手を握りしめると、ハイテンションでそう宣言した。その言葉に引っかかるものを感じた真咲は、おそろおそろ手を振りほどく。

「ちょっと待って、本社って……」

真咲が訝しげに尋ねる。

手元には半分ぐらい無くなってしまった紅茶。もしかしてこれを買ってきたのは……。

「違ったらいい」と願った予想は、行成のあっけらかんとした声とともにすぐに肯定された。

「関西だよ」

Puppy Love (3)

(ウソ……だよな?)

一瞬頭を殴られたかのように気が遠くなりかけた。聞き間違いじゃないかと思って「カンサイ?」と尋ねると、「そうそう。だから面接のついでに京都寄ってきたんだ」とダメ押しのような事実を突きつけられた。

「……関西のどのへん?」

「大阪に梅田つつつて大きなターミナル駅があるんだけど、そこから地下鉄に乗り換ってすぐ。結構飲み屋なんかも近くて便利な場所だったな」

一応聞いてはみたものの、どんなところなのかさっぱり見当が付かない。けれども、今の自分にとっては果てしなく遠い場所というのは知っている。親戚もいないし、同じ日本の中とはいえそんな所に行ってしまったらおいそれとは会えなくなる。

「それじゃ——」

真咲が口を開きかけたとき、行成の背後から「ブーツ、ブーツ」という鈍い振動音が聞こえた。

「ごめん、電話だ」

行成は真咲の言葉を遮ると、こちらに背を向けて棚の上に置きっぱなしだった携帯電話を手にした。

「ああ……。うん……。それじゃ、今から行く」

穏やかな声で電話の向こうの相手へと相づちを打っている。右の耳に電話を押しつけているその姿は、同じ部屋の中なのに、何故かひどく遠い所にいるもののように感じられた。

通話を終了させると、行成はふたたび真咲の方に向き直り、申し訳なさそうに首を傾げた。

「マサキすまん。今からちょっと出掛けなきゃいけないんだけど……」

「あ……。ああ……」

行成の声で我に返った真咲は、生返事をする傍らに置いてあったランドセルへと手を伸ばした。

重いランドセルを背負って立ち上がる。なんだかここのところ、肩のベルトが急にキツくなってきたような気がする。

行成と一緒に玄関から出て階段を下りると、今から駅の方へ用事があるという行成とは逆方向に歩き出した。

沿道の家々からせり出している庭木は、瑞々しい緑色から暖かい秋の黄色へとうつすらと変わり始めていた。だが、そんな見慣れたはずの道の変化も、真咲には全く気づくことができなかった。

呆然としながら、震える足取りで歩みをすすめる。頭の中を占めているのは、たった一つのことだった。

『来年からはしばらく本社で営業だって』

これ以上はないほど嬉しそうな顔で彼は言った。彼はあまり詳しいことを語らなかったけれど、将来が決まっていなくて不安だ、と

いうことは以前ちらりと零していた。

それにニュースなどでも、大学生の就職が困難だということは繰り返す耳にする。そんな中見事に採用を手にしたのだから、今まで散々彼に世話になってきた身としては、何よりも喜ばなければいけないことなのかもしれない。それぐらいは小学生の自分にも解る。

だけど――

『球場で何でも好きなものおごってあげるから』
『春になったら釣りにも行きたいな』

あの月夜の晩にした約束はどうなる？ 自分は彼との約束を叶えるべく勉強も頑張ってきたし、期待を裏切らないよう、馴染めないながらもクラスメイトともなんとかうまくやって来た。

それなのに彼は、そんなことなんてすっかり忘れてしまった様子で、明るく「関西に行く」と告げてきた。

彼にとっての自分の存在なんて、その程度のもの。彼は自分を置いたまま、どこか手の届かない遠いところに行ってしまうおうとしているのだ――

サイダーなんか渡さなきゃよかった、と自分を責める。そうすれば、内定は今より遅くなっただろうけど、もしかしたらここから通えるような会社に通めることができたかもしれない。

決まってしまったことは今さら覆らない。けれども、今の真咲はあの時の自分の行動を、どうしても許すことができなかった。

週が明けて数日後、下校ラッシュを過ぎた時間に真咲が昇降口で靴を履き替えていると、またもや後方から女子児童に声を掛けられた。

「まーさーきーちゃん、一緒にかえろ♪」

後ろを見て確かめるまでもない。真咲は座ったまま愛実が下足を履き終わるのを待つ。

（とうとう来たか……）

真咲は愛実に見えないように軽くため息を吐くと、ぎゅっと拳を握りしめた。

今日の愛実は少しくせのある長い髪を、上半分だけ後ろでくくっており、顔周りがすっきりしてる分より一層大人びて見えた。

歩きながら愛実は「最近いとお姉ちゃんに彼氏が出来た。あんまり自分の好みじゃないけど楽しそうでうらやましい」という内容のことをずっと喋っており、なかなか向こうからはこの前の件について触れてこない。

けれど、このまま流す訳にもいかない。今日言えなかったとしても、遅かれ早かれ伝えなければいけないことなのだから。

話が一旦落ち着いたところで、真咲は自分の方から切り出した。

「あのさ、この前のこと、久慈くんに聞いたんだけど……」

愛実が虚を突かれたように真咲の顔を振り向いたので、真咲は反射的に俯いてしまった。

口が酸っぱくなる。せっかく出来た友達だから、傷つけるのは辛い。けれど、こうなったら仕方ない、と覚悟を決めて呟いた。

「……なんか、他の子が好きっぽい」

それに対する愛実の反応は、真咲にとって意外なものとなった。

「へえ、そうなんだ」

Puppy Love (4)

愛実は特に驚いた様子でも、ショックを受けて落ち込むわけでもなく、どちらかというと興味なさげに頷くだけだった。

茫然とする真咲に、愛実は少し照れたように笑って、足を止めると神妙な口調で囁いた。

「実はね、真咲ちゃん。ずっと聞いてほしい事があったんだけど……」

「えっ？」

顔を近づけてごによごによと耳打ちする。真咲もつられて小声になった。

（最近、私が通ってる塾に、新しい先生がきたんだけど。眼鏡かけててちょっと頭よさそうで、イケメンの）

（うん）

（たぶん、大学生なんだけど、その人と、授業始まる前に偶然近くのコンビニで会ったのね）

（そう。それで？）

（私のことなんて覚えてないだろうなーと思ってたら、飲み物選んでるところに来て『前田、早くしないと遅れるぞ』って言うてくれて。それでお茶もおごってくれたんだ）

（へえ。よかったね）

真咲が返すと、愛実は耳から手を離して、かぁっと赤くなった頬で語り出した。

「もうさ、それだけでドキドキしちゃって。できれば今度何かお返

ししたいんだけど、そういうのって迷惑かなあ？」

なぜここでこんな話がでてくるのだろうか、と訳がわからずにいたが、その理由は愛実の潤んだ目を見てようやく理解出来た。

要するに、愛実はその先生に惚れてしまったのだろう。だから久慈のことはもうどうでもいい、と。

それならそうもつと早く言ってくれば久慈と陰悪にならなくて済んだのに、と若干恨めしくもあるが、愛実が傷つかずに済んだのは何よりだ。

真咲は苦笑いしながら答えた。

「よくわかんないけど。でもお礼するぐらいならいいんじゃないの」「……そう言ってもらえると安心するな。真咲ちゃんに言ってよかった。真咲ちゃんならわかってくれると思うってたんだ、こういう気持ち」

「そう、かなあ……」

新しい恋に落ちたばかりの愛実は、「それじゃ今度クッキーかなんか焼いて持ってこうかな」などと戸惑いつつも楽しそうだ。

真咲が「どんな人か、見てみたいよ」とため息混じりに言うと、愛実はますます幸せそうに目を細めた。

「今度写真撮ってもらってくるから、見せてあげるね」

そこまでしなくても、と真咲は思ったが、当の本人が乗り気なのを止めるまでの気力はなかった。

「えっ、他に乗り換えてた？」

行成が驚きに目を見開きながら言った。

「……うん。なんか、今は塾の先生に夢中みたい」

「へー……。そうなんだ。最近の子はドライっつーか……。切り替えが早いのねえ」

行成が半ば呆れた様子でくくつと笑った。その気持ちには真咲もほぼ同意だ。

今日は行成がいつも読んでいる漫画の新巻の発売日で、前から続きが気になっていた真咲は、もう買ってる頃じゃないかと思って遊びに来た。

案の定行成はすでに読み終わっていて、漫画を借りた後はすぐに帰らず感想を言い合ったりなんだかんだとおしゃべりをしていくのが常なのだが、今回はお茶を飲んでいるときに行成の方から「そういえば、この前の話どうなった」と尋ねられた。

愛実との事の顛末をざっくり話すと「振り回されちまって災難だったな」と行成が真咲をねぎらった。そういえば、愛実からこの手の台詞は聞いていなかった。

「しかし、塾の先生っていくつ？　すでにもういいオッサンじゃないの？」

「その子が言うには、大学生みたいだよ」

「そっか。それなら俺と同じかちよつと若いぐらいか……」

行成が何気なく呟いた言葉に、真咲はドキッとしてしまった。

愛実ののろけ話を、「ちよつと歳が上すぎるんじゃないかな」と思いながら聞いていたが、それを言うなら自分と行成だって同じぐ

らい離れているのだ。

……もしかしたら、愛実の言っていた「真咲ちゃんならわかってくれると思ってた」というのはそういうことなのだろうか。誰にも言っていないはずなのに、いつのまにか気づかれるようなことをしてしまっていたんだろうか。

穿ちすぎな考えを追い払うように首を振り、テーブルの斜め向かいに座る行成の横顔を盗み見た。

立つと大きいくせに、顔が若いせいかこうしてると全然そんな感じがしない。柔らかそうな長めの前髪が、薄めの眉毛にかかっているのを見るのが好きだった。

あと数ヶ月で、この横顔が見られなくなってしまう日が来るのかもしれない。そう思うとより一層彼の顔から目が離せなくなってしまう。

「俺の顔に何かついてるか」と言われる直前で、真咲は視線を逸らし、好奇心からついこんなことを聞いてしまった。

「行成はどう？ もし自分の生徒が『好きです』って告白してきたら」

行成が何個か掛け持ちしているアルバイトのうちの一つが、学習塾での講師だと以前話していた。

確か教えているのは中学生だったが。この際そんなに変わりは無いだろうと彼の出方を伺う。

行成は首を傾げると、何か不味いものでも食べたかのように口の周りを歪めた。

「えー？ ガキなんかに興味ねーよ」

「あっ……、そう……」

さも「あり得ない」と言うような答え。しかしここで「全然アリ

！」などと言おうものならそれはそれで問題だが、こうも言い切られてしまつてはその「ガキ」以下の年齢の自分や愛実の立場がないだろう。

変なことを聞かなければよかった、と後悔する。気分が落ち込むと、それにつられて今朝から調子の悪かった下腹部がまたしくしくと言ひ出した。いつもと同じものしか食べていないはずなのに、何だか今日はおかしい。

「……ちよつと、お手洗い借りるね」

お腹を抱えてトイレへと向かう。歩き出すと急に立ち上がったせいか、頭がすこしくらくらした。

「ふー……」

便座に腰掛けると、ひとつため息を吐いた。行成の家は古いからかトイレと風呂がちゃんと別れており、それにしては珍しいことだが便座にはなぜか暖める機能が付いていた。

真咲は用を足そうとしたところで、目に入つたものに思わず息を呑んだ。

「え……」

下着に血が付いている。

こんなところを怪我した覚えはない。どこも痛くないし、むしろ疼くのはお腹の中だ。

(もしかして、これって……)

まさか、と愕然とする。トイレットペーパーで拭ったものを恐る恐る見てみると、それも赤く染まっていた。

ちくしょう、なんてタイミングだ、と自分の運の悪さをなじる。自分は体もさほど大きくないし、勝手に遅い方だと思いこんでいた。よもやこんなところで始まってしまいうなんて、間が抜けているにも程がある。

「おい、大丈夫か？」

ドアの向こうから行成の声が聞こえた。なかなか出てこないことを心配してくれてるのだろうが、異性の、その上自分のことを男の子だと思いこんでいる人間に言えるはずがない。

どうしよう、と狭い室内で頭を悩ませていると、不意に部屋の外から音がした。

(キンコーン)

誰かが行成を訪ねて来たようだ。便座の上に座りながら、外の様子に耳をそばだてる。

「あれ、どうした？」

「偶然近く通ったから何してるのかなあって。それとも、来られたらまずかった？」

「バカ。んなわけないだろ」

相手は若い女性のようなだ。しかも、かなり親しい。

気になってドアを少しだけ開けて顔を確かめようとする。すると、

来客者の女性はちょうどこちらを見ていたようで、行成の肩越しに、ドアの隙間にいる真咲を目敏く見つけて口を開いた。

「あら、この前の……」

Puppy Love (5)

行成が彼女につられて真咲の方を振り向く。

「この前って……？」

「ほら、野球見に行ったとき。あのとき連れてた子でしょ？」

今思い出したというように、行成が「ああ」と言って頷いた。

「家にまで入れちゃうなんて、ホントに仲がいいのね」

彼女は口元だけで笑うと、手を行成の肩にそっと置いた。何故だかそれを見ていられなくて、真咲は慌てて目を逸らした。

じり、と再び下がって扉を閉じようとする。なんだか彼女は怖い。お人形さんみたいに整っている顔のせいもあるかもしれないけれど、それだけじゃない。何か、もっと突き放したような冷たさを感じる。

「ねえ、あなた。ちょっと」

ドアが完全に閉まる直前で、真咲は彼女に声を掛けられた。

ビクツと固まっているうちに、彼女がすたすたと歩いてこちらに近寄ってくる。まずい、お尻を見られたらどうしよう。もしかしてシミができてるかも。いや、それよりも彼女は行成よりもずっと勘が鋭そうだ。何もしてなくてもバレてしまうかもしれない。

彼女は真咲の前に立つと、透き通るような白い肌で覆われた顔をこちらに俯けて尋ねた。

「何て名前なの？」

「ま、まさき」

普段の平坦な発音ではなく、いつも行成が自分を呼ぶときのよう
に「ま」の方にアクセントを置いて答える。

すると彼女はふたたび口角をつり上げた。相変わらず、目は笑っ
ていない。

「まさき『ちゃん』。今日、これから行成君にごはん作ってあげよ
うと思うんだけど、どう？　一緒にたべない？」

「えっ……」

「遠慮なんかしないで。いろいろ、聞いてみたいこともあるし」

そう言いながら彼女の鋭い猫目が値踏みするように自分を見つめ
た。「聞いてみたいこと」って何だろう。背中に汗が滲んでくる。
暑いわけでもないのに、嫌な汗だ。

これ以上こっちを見ないでほしい。お願いだから、やめて。どっ
か行って。

彼女がもう一度口を開きかけたとき、外から夕方五時半を知らせ
るアナウンスが流れてきて、真咲は「あっ！」と声を上げた。

「もう、帰らないと！　今日宿題いっぱいあるし！」

「えっ？」

呆氣にとられる彼女の横をすり抜けて、部屋にもどってランドセ
ルを引っつかむ。

慌ただしくスニーカーに足をつっ込むと、行成の方も振り返らず
に玄関のドアを開ける。

「それじゃね、バイバイ!!」

わざと大声で言い残して、ボタンとドアを閉める。ドアの向こう

から「おいちよつと待て」という声が聞こえた気がしたが、なかったことにして階段を駆け下りた。

外は早くも日が落ちかけていたが、後ろが気になって早足になって家路を急いだ。

せっかく借りた漫画を行成の部屋に置きっぱなしにしてしまったことには、その日寝る直前まで気が付かなかった。

体の変化があったことを母親に告げると、母親はあっけないほど淡々として生理用品の使い方を教えてくれた。

だが何となく体も心もすっきりしない。憂鬱な気分のまま次の日の朝を迎えた。

始業時間ぎりぎりになって登校すると、真咲の隣の席の久慈はすでに来ていて、賑やかな教室の中、ひとり片肘を付きながらボールペンをくるくると回していた。

「お、おはよう」

挨拶をするが返事はない。最近じゃいつもこんな調子だ。

しつこく話しかけられていた頃は面倒だと思っていたが、こんな風な態度をとられるのはやはり寂しい。

いつになったら機嫌を直してくれるのだろうか、と軽いため息を吐きながらランドセルを机の上に置いて、自分の席に座る。

ランドセルから勉強道具を取り出して、それらを机の下へと押し込む。すると、机の中で何かがくちゃっと潰れた感触がした。

（何だろう？）

いったんノート類を引き抜く。中を覗き込むと、茶色い模造紙がぐしゃぐしゃになって机の奥にへばりついていた。

手をつ突っ込んでその紙を取り出す。何かのプリントかな、と紙を開いて見たとき、真咲は顔面から血の気が引いていくのが分かった。

（なにこれ……）

『死ね、バカ』と殴り書きされた文字。

差し出し人の名前は、もちろん、無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963w/>

静かの海

2012年1月13日19時56分発行